

非祖芭蕉翁御肖像同御真跡

黃華菴南齡宗匠

北杖堂似水宗匠

補陰波鷗宗匠



下編

# 非諧七部集講義

竹二菴鶴敵宗匠

野坡菴露城宗匠

松華園窪處大人

序文 圭文堂藏版

辨七部集講義附初懷紙

卷之下

ひささ



江南の珍碩我れにひさこを送れり夫れはこれ水漿をより  
酒をたむ器にもあらず或は大樽に造りて江湖をわたれ  
といふるふくへにも異なり吾れまた後の惠子にして用る  
ることをしらすつらく其ほとりに睡りあやまりてこの  
うち陥いる醒めてみるに日月陽秋さらゝかにして雪の  
あけの闇乃邪公もかけたることなくなほ吾る知人とも  
見ゆ来たりて皆風雅の藻思をいへりしらす是はいつれの  
ところにして乾坤の外なる事を出て其ことをいひて毎日  
此うちをとり入る

元禄三六月

越智 越人

鄒集の催主珍碩序文を越人に帯めたるなりさるを江南の珍碩我れにひさ  
こを送れりと寓言して此序文の題となしたる之此文の依て起る處は莊子  
に曰惠子謂莊子曰魏王貽我大瓠之種我樹之成而實五石以盛水漿其堅不能  
自舉也剖之以爲瓠則瓠落無所容非不愕然大也我爲其無用楛之莊子曰夫子  
固拙於用大矣今子有五石之瓠何不虛以爲大樽而浮乎江湖而愛其瓠落無所  
容則天子猶有蓬之心也この序文は熟讀詠味をべし此序文の意に通づれば  
併諧の大意をるべき也

花 見

木のもとよ汁え繪もさくらあ

翁

汁も繪ものもは重ぬるもといふ汁繪の二種をいひて其他のものも櫻とい  
ふ意さこゆるなり此句の哉はうち合詞を省きたる例にて汁も繪もの下に  
句ほとしき杯いふ詞を添へてさくべし

西日のとめによき天氣あり

珍 碩

發句に汁も繪も櫻哉といふを頼て夕暮の空に散りかゝる櫻をかして其景

氣をいひ添へたる之此句のなりの靡なり也

旅人の風あきゆく春くれ玉 曲 水

春もやしくれゆく頃なれば旅衣も着ふるしたるさまにて脇句の西日のと  
かなるうつりかれども發句に轉して更に人情をおこしたる也

佩きえならむ太刀の鞆 翁

太刀の鞆は革つくりの太刀にて其革に蕨の肌ハダの如き班文の有るものあり  
旅行杯も佩ふる太刀からん附意は風かきゆく旅人の中にうちまじりたる  
旅馴れぬ人にやあらん

月待た玉假の内裏の司召 碩

待たではすしての約り之司召は八月十一日なれど假の内裏なれば何か故  
有りて例よりとやきを月待たでと作したるならん附意と鞆の太刀佩きた  
る人を司召に都へのはる旅とあしたるなるべし

粉白つくる朧をやめき 水

此句秋季の詞を用ゐず、糶曰つくるといひて、秋季よなしたる之附意と假の内裏の御膳料の糶曰よて俄に爲すべきさまを早わざといひ又山中と見て和といひたるあるべし

鞍置ける三歳駒に秋の来て 翁

三歳の駒に鞍おきてつかひ初るあるべし附意は前句糶曰つくるといへば農事につゝるふ馬とも米杯とこふ馬ともさかるべし

名をさまくに降りぬる雨 碩

前句秋の来てといふ余情を初秋の雨となし夏にはやゝ趣のかはりたるより春雨よりさみたれ夕立秋の雨時雨キシカゲノアメ杯過去未來の觀相を名をさまくにふりある雨と附けたるなるべし

入りとみよ諏訪の涌湯の夕まきき 水

諏訪之信州涌湯イヅナの入こみの賑としき夕暮のさま之此温泉に久しく逗留なし居るうちに名はさまくにふりかはる雨といふ附意ならんか

中よえせいの高き山伏 翁

人さまくの中にも異やうの装ひしたる脊の高き山伏の目たつさまにて則涌湯の夕暮の賑はひなるべけれど前句にあたりて中にもといひたるにはあらずあしく解する時は二句一意になるべし

いふ事と唯一方へ落としけり 碩

落ち落つは自らオソシカ然なる詞落とし落とすはみづから然なと詞之けり此句にはたものぢやと俗譯す前句山伏なれば修験道に一途なるさまにさこゆ都て此句の如き作と前句後句により何事何道よもさこゆるべし

ほろき筋より戀つのもつゝ 水

筋よりのよりは東より西より杯のよりにて古言之俗言にのからといふ募りつゝと募りて募りてのがつゝと活きたる之又此つゝは前句のけりにうち合ひたる之附意は前句に解さし如く此句をつくる時と前句は戀の情に一途なるやうにさこゆるなり

えの思ふ身に物喰へとせつめれて 翁

戀の情のつものりく〜て食事もすいませぬまでにも思ひゐるさまなれば句意附意とも去さいなし但し此句ては前句のつ〜にうち合ひたるなり

月見る顔の袖重き露 碩

顔のののは物思ひしく杯いふ意をふくむ此余情を前句に通はしたるなりこれをにはほひともひいさともいふべし又袖重き露は實の露に濡れたる袖とも涙に濕りたる袖ともさくべしこれ又もの思はしき姿見ゆるあり

秋風の歌とこをめる波の音 水

此秋風のののにつよくゆるといふ意をもたしたりと一書にいへど下に波の音といひあらはしたれば此のはかるさのにて意をふくみたるにはあらざらん若下に波の音といふ詞なければ一書にいへるが如し都てのを杯の天爾波に他にいふべき詞をもたしたることわりと此句の波の音といふ詞の有ると無きとよて上の秋風のののが軽くなるも重くなるものことわり

にてゑるべき之附意は前句の月見る人も乗りたる船なるべけれ此句をつくる時は前句の袖の露を涙とも見るべし

雁ゆくかたや白子若松 翁

雁ゆくかたやのやは疑之若松の下にならんといふ詞を添へてさくべし附意は前句の船より雁のゆく方はや白子若松ならんと空を眺めたるさまなり白子若松は伊勢の地名なり

千部讀む花の盛の一身田 碩

一身田は高田派の本山之千部讀むと千部修行之一書に淨土の三部經を一部として毎年春三月僧百人にて轉讀せるとぞ附意は鴈ゆく方や白子若松といふを一身田のあたりより眺めたるさまになしたる之又前句の鴈は秋なれどゆくといふより春季にうつしたるなり

巡禮死ぬる道のあける水

一身田のはどりの道はたに巡禮の死ぬるにて其はかなきを陽炎よ準らへて春季になしたる之偕此死といふ詞と死を死に死ぬ死ねと四段に活きて

又斷止段のぬにるの添ひて死ぬると靡有る詞に在るなり故に變格に活く  
詞といふ事は上卷の凡例の中見合はすべし

何よりも蝶の現をあたまきある 翁

現ぞのぞは中のぞにてうち合はせ詞有る例也則あはれなるとうち合はし  
たるなるはに有るの約り靡なりの現在に活きたる之此句の莊子の佛也  
莊周夢爲胡蝶栩栩然胡蝶也自喻適志與不知周也俄然覺則遽々然周也不知  
周之夢爲胡蝶與胡蝶之夢爲周與周與胡蝶則必有分矣といふ意にて巡禮死  
ぬる道の陽炎に通はしたるなり

文めく程の力をへあき 碩

文書く程は俗言のまいつかひたる之古言ならばばかりとすべき處之力さ  
へも俗言のまいつかひたるにて古言のだにといふ意之ふみ書くばかりの  
力だになきは病む人か何々のやうにさこゆる之此はかなげある意にて蝶  
の現のあはれなる又通はしたるなるべし

羅に日といとばる、御あちち 水

躰弱力微若不任羅綺なといふ意にて文かく程の力さへなきといふを頷て  
婦人となし前句をも戀になしたるなりいとばるゝ下のは靡にて被の字  
の意敬づきていふる

熊野見たきと泣き給ひけり 翁

見たきと云狀の詞一書にはさきよりうけずとてしと直し熊野見たしとと  
なしたれどとはしをもさをもうくべき事は上卷に辨したり附意は前句の  
羅に日といふを歩行のさまとなしといはるゝ御かたちといふ敬づきたる  
意をうけて泣き給ひけりといひて若君か姫君かのやうにさかしたる一  
書に増鏡に出てたる久仁親王の御年十一にして熊野へまきりに参るべき  
よし仰せらるゝ佛といふ

手束弓紀の關守め顔に 碩

手束弓は握る處を卷きたる弓之又萬葉に紀の關守か手束弓といふ歌有れ  
ば此句の手束弓はまくら詞の如くさくべきか紀の關は和泉紀伊の境なり  
附意と關守が顔に拒みて通さざるさまにさかして熊野見たきと泣き給ふ

といふに通はしたるこ

酒をかけたるあまなるらん 水

酒でのでは俗言はけたるはて有るの約りなるらんなるはに有るの約りらんは上に疑詞なければ推量の意也附意は前句の關守を頑固の老爺と見立て其人の天窓の酒ではけたるらんとをらしく作したるこ

双六の目とのそくまで暮まゐ、る 翁

のぞくまでは古言之俗言のはとといふ意之此までの解の上巻に有り附意は酒で天窓のはけたる人の双六うち居るさまおれを目をのぞくまで暮れかゝりといひて一方の人の目をのぞき居る天窓を一方の人の見たるさまにきこめていとをかし

假の持佛よ向ふ念佛 碩

事たらざる假住居なれども朝夕の念佛はかゝる信者のやうにきこゆ附意は前句暮れかゝりといへば夕念佛なるべけれど此句の附さまはいさゝかこゝるゆかす前句の双六には疎く打越の元けたる天窓に親しきが如

し一書に前句双六の目をのぞくまで暮かゝりてやめし体と見立て其後の用をつけたり云々といへども斯の如く迂遠なる解をなす時といかなる句にても大体はつくべし

中々よ土間に居れを蚤もなし 水

此句のもおしは天爾波にあらす譯は上巻に見たり附意は前句假の持佛といへば假家のさまなり

我の名を里のあふりものあり 翁

此句のなりはに有りの約り靡あり之附意は前句土間に居りて安堵なし居るを清貧者にて唯の人には異なるさまに見立て里の童等杯のさまくよ字なすさまあるべし

憎まれていらぬ躍の肝を煎り 碩

憎まれるのれは被の字の意之肝を煎りと世話をやく之附意は又躍の世話やさて里の人等に字せらるゝさまよて打越の清貧者を世話好の人と見るへ

たるまでなり

月夜くよ明けわたる月 水

毎夜く躍の世話やきて明らすといふを斯く工みにいひなしたるこ

花す、きあまり招けをうら枯きて 翁

花すいさの招きくうらあるいといふ意にて前句の月夜くといふに通はしたるなり

唯四方ある草菴の露 碩

唯四方は一丈四方杯の草菴なるべし露とすいさのうつりにてうらかれたる野の中の草菴あればしさいなし

一貫の錢むつろしと返しけり 水

むつかしとの下にいひてといふ意をふくみたり附意は前句の菴主の貧なるさまなるべし

醫者の薬まのまぬ分別 翁

句意の解に及ばず附意は前句の貧者の病み居るさまに一書に一貫の錢むつかしと其ま返しけりといふ句と見立ていづれ死すべき命なれば人の厄介になりて苦き薬のむよりも命を天に任さんといふ覺悟を述べたりといふ都て俳諧の附意は此句に限らず斯の如く一方へのみ解きつむる時は狭くなるなり前句の一貫の錢のむつろしきは貧者にて此句の醫者の薬はのまぬといふは病者の意中之其余情はさく人いかんともさくべきとのまぬといふは病者の意中之其余情はさく人いかんともさくべきと

花咲けを芳野あたをあげ廻る 水

咲けをは咲きたによつてといふ意若咲かばといへは咲きたらばといふ意になるこれ咲といふ四段活の詞のあ緯と紐とにて未然と已然とわかるい上巻凡例の中見合はすべし附意は醫者の薬はのまぬ分別といふ人の花に氣はらすさまなるべし

蛇よさる、春の山中 碩

句意解よ及ばず附意も芳野に山中なれをしさいあし



○ いろくの名もむつめしや春の草 珍碩

此句のやは状のや之則むつかしといふしき状の末をうけたる之志状しき  
状の解上巻に見ゆたり廿五條にはまぎらはしとなしたり此句俳諧を問ふ  
人のさまぐの名目のまぎらはしといふ意こといへり

うたれて蝶の夢もさめぬる 翁

蝶乃夢は莊周の佛からぬるのぬはてしまふと俗譯するは靡にてさめて  
しまふといふ事の己にうしろになりたる詞之附意と蝶を以て草に通はし  
いろくの名もむつかしやと迷ふ意をうたれて夢は覺めぬるとなしたる  
なるべし廿五條にと俳諧の意味をたつぬる人に一棒を與へたる相對の脇  
こといふ夢はさぬるを目をさましぬるとなしたり

蝙蝠の、とめりしうらぶらと出して 路通

此句いさゝかこゝろゆかず蝙蝠の面さし出すとばうりにていかかる處よ  
り面さし出したたりともきこえず故に附意も解しゝたけれど脇句の蝶の夢  
さましたるを草家のほとり杯と見立て壁窓杯の蝙蝠にやあらん但蝙蝠は  
夏季あれば長閑を以て春季になしたるなり

駕籠の通ら峠越はたり 同

句意はさこねたり附意は前句を詳にせざれば解きがたしと雖も蝙蝠を夕  
暮と見て峠越はたりとあしたるならん一書二蝙蝠の如く長閑な面をさ  
し出してといふ句と見立て近頃爰に住む無鳥里の蝙蝠の黒羽織醫者也選  
隣村より招かれ強て乗物にて出てけるに蝙蝠住む坂中の岩穴邊は駕の通  
らねば據ちく駕返して歩行しけるを迎の者の其權柄を准言して笑ふさま  
之といふ俳諧の附意は斯の如く落語か俄狂言のやうなるものにあらず上  
巻曠野集深川の夜といふ巻の名残の花前馳走する子の瘦せてかひなきと  
いふ句の處にも此書の註解を論破したり此書も日に板行に成りて世に廣  
まりたるもの故若初學びの人の俳諧の附意は斯の如きものならんと誤解  
する時は甚此道の害之依て止むを得ず淺ましくも此の書を誹謗するもの

紫蘇の實とあますよいる夕間暮

頌

紫蘇の實杯も澤山なる山本の里の夕間暮のさまをれを前句の峠越ぬたりといふによくうち合ひたるこ

親子あらしひて月よ物とふ

同

夕月のさす椽先杯に親子ならびて物くひ居るにて其はとりに紫蘇の實をうますにいろし田舎のさまあるべし

秋の色宮ものろあせ給ひけり

通

秋の色は紅葉をいふなるべけれと此句の如きは唯秋の景色ときくべし句意はいかやうにもきかるべけれと前句につきてみる時は官方の旅体杯にてそと愛と秋の景色見ろなとせるに或賤の家にも月さす椽杯に親子ならびてもものくひ居るさまあらん

あそくらられても笑ふおえあけ

全

こぞぐられてと此てはといふ天爾波はてにこの添ひたるなれとつゝとい

ふにこゝろおはかた同しころぐられて笑ひころぐられて笑ひなすさま之おもかけ此句には翠簾越し杯にはのかに見ゆるさまなるべし稚見侍女杯の戯れ居るさまにて宮ものぞのせ給ひけりといふにひいきたるこ

うつり香の羽織と首にひきまなて

頌

句意は冬の日時雨の巻の襟に高雄が片袖をとくとといふに粗相似たり附意は前句を揚屋杯の戯れと見たるなり

小六うたひし市のあへるさ

全

小六は元祿頃はやりし小唄とみねたりうたひし此しは過去の意なる故調ひがたしうたへるとかうたひてとゐなすべき之或は寫し誤りかもしるべからずかへるさのさは往さ來るさ杯のさにて形状言之附意はうつり香の羽織を首にまきて小六ぶしうたひつゝかへるさまなればしさいなし斯くいふ時は二句一意のやうにさこゆれを附意を解かんがためなれば註譯になつむべからず

鯉釣のちひさと見ゆる川の端

通

鮠は鮎の類なれど此句には難なるべし附意は川端に鮠つる人を遙に眺め小六ふしうたひつゝかへるさまあるべし

念佛申してとめむ瑞垣 全

一向宗の信者杯にて神前に向ひても念佛申して拜むさまあるべけれと附意は鮠のどるゝ川を遙に眺むる處の宮居にていつれの神社ともさゝ定めがたし

としらへ志樂もうれす年の暮 碩

藥ものもは何も何も杯いふもにて正面の事を言外にさかしたる天爾波之則藥もうれすといへを其他の事のみな思ふさまにあらざる意を此もにてさうしたる之偕此句の附意はいさゝかこゝろゆるされと都ての事の伊須加の紫の如く齟齬ひたる年の暮を困しはてたるさまよて神に向ひても歎息の念佛申と杯といふ意にや猶後學者の考へを待つ

庄野の里の犬にねとさき 全

庄野あたりを藥うりありくものうき顔に犬の吼ねつゝさまあるべし一書

に龜山にいく藥のみ有りといへばとゞめんかたもあき別れ哉といふ古歌をとりて庄野をつけて前句を龜山の藥に活したりといへども前句に藥といふ詞有るのみにて此古歌に似通ひたる處さらになし

旅姿稚き人の嫗つれて 通

こと嫗が稚き人を連れたるなれど稚き人が主にて嫗が臣なる故のくいひたるなるべし附意は此稚き人の犬をこわがり給ふさまならん

花は赤いよ月を朧よ 全

此句月は朧夜とあれど上に花を赤いよと有れば月は朧よあるべしこは再板の時よを夜とあしたるならん此上は俗にいふ暑いよ寒いよ杯のよなり哉といふにこゝろおはかた同じ附意は花は赤いよといひて稚き人といふにひゝししたるなるべし

汐のさす縁の下まで和日あり 碩

和日にはひ杯とも訓すれどのさうといふに同しなりは靡なり之附意は前句の花を庭杯と見立て縁となしたるならん

生鯛あがる浦の春あふ 全

此句の哉はあがる哉の間に浦の春のはさみたる名の哉のやうにも見ゆれ  
と然らすうち合はせ詞を省きたる例にて浦の下に賑はしき杯いふ詞を  
添へてさくべしあがる浦といふ体言についたるなり附意は縁の下ま  
で汐のさすに生鯛あがるとなしたればしさいなし一書に毎年三月嚴島天  
神の御遊歌鯛千枚用ゐる恒例なれば前句を宮島の廻廊と見立てたること  
いふことは句の外の意味なれと参考のためしるまか

此村の廣きに醫者のあまけり 荷 兮

廣きにのにのにといふ意なかりは無く有りの約り之けりは前に度々  
解きたり附意と前句の生鯛あがる浦のさまなるべし

ろろまんおけばものしりといふ 越 人

句意解に及ばず附意も田舎のさまなればしさいなし

おもらする世と退屈もせず過ぎ 兮

かはらざるこす有るの約り之世をのをはなるをといふ意にて俗言のちや

のにといふにあたる此をを重きをといふかるきはそれをこれを杯いふ  
を之句意はいつもく同じ事のみしていく年か暮するといへるなるべし  
れと殊に田舎は珍しき物事を見聞することもなしといふ意にて前句の算  
盤おけばものまるといふといふ片田舎らしき意にひいかしたるなるべし  
此句は殊に玄妙の余意有れば既味すべし

また泣き出す酒のさめきを 人

またといふ詞にていつも酒のさめきは泣く癖の有る人ときかしたり前  
句のかはらざる世を退屈もせずといふを酔へるが如く夢の如く生より死  
に至るまで覺らず杯いふ語を思ひ出し愚痴なる人のさまを附けたるなら  
ん

なめやる秋の夕へろと、ひろき 兮

ながめやるのやるは天爾波之文をやる使をやる杯のやるは詞之此詞を思  
ひやるながめやる杯とつるふ時と天爾波になる夕べのどは中のぞに  
てだゝひろきとうち合はしたる之だゝひろきは俗言をとりてをかしくき

かしたる之附意と酒のさめきはに秋の夕空をかめやりたるさまなるべ  
けれと秋の夕べの淋しき意にて泣出すといふに通じだ、びろさといふ  
詞は酒のみてと泣き杯するしまりなき人品にひいたるなり

蕎麥真白に山の胴中人

真白なる蕎麥畑を眺めやりたるさまにてだ、びろさに山の胴中とをかし  
き詞を對したる也

温飽うつ里のまつきの月の影

山の里はづれの家に温飽うつさまかれと此句又蕎麥ようとんを對したる  
なり

すも、えつ子のみま裸むし

うとんうつ家の有る里はづれに李もちて遊び居る子等のみな裸といふ  
までと

めつらしやまゆ煮る也と立ちとま

めつらしやはまき狀の詞の末をうけたる狀のや解上巻に有り煮るこのな

りは末なりにてはいといふ意之藪を煮て糸とり居るを珍らしき事やのと  
立とまり見るさまなり附意はまゆ煮る傍に李もつ子の遊び居るさまなれ  
と李に藪と時候を合はしたる之題よと藪は春季なれども藪の夏熟して綿  
絮は秋出その之故に或説に秋の新綿は此綿をいふと見ゆ新綿を秋とな  
すをも思ひ合はすべし但し木綿も秋とるものなれば新綿といふべし又い  
ふ前句の李は増山井に夏となしたれば此句も夏のつもりにてつけたるか  
又藪は題書にあきものある故李をこゝろにもちて附けたるまでにて夏に  
ても秋にてもなく裏句なる也

文珠の智慧も榮持め愚痴人

此句詞足らざるが如くにてき、がたし智慧ものもは何も何もとつるふも  
あるべけれと此も一字にてと語をなしがたしたとへば山の高さも海の深  
さといひたるが如し愚痴の下に省かりたる詞有るやうなれといかなる詞  
の省かりともき、定めがたし句者の意は前句の藪の糸とる業の工みなる  
を見て聖は道によつて賢し杯いふつもりにもや猶後學者の考へを待つ

あれ加減またとは出来しは志深味曾 兮

出来しは俗言にまいといふ意すとは定めがたきをじといふこひしはは盤  
之ことからすもよき加減に出来たるを文珠の智慧も及はじ杯と戯れいふさ  
まにきかしたるなるべし

何ともせぬに落つる鉤棚 人

せぬにのにはのにといふ意にきくべし前句の醬味嚼譽め居るを臺所杯と  
見立て棚のおちたるさまをつけたるならん

このふ夜のをめしうありを笑ひ出す 兮

をかしうはしき状の詞のしくのくの音便にてうになりたる之故に此うは  
ふとは書くべからず約束杯有りてしのび居りたるに鉤棚のおちてををし  
くなりたれば笑ひ出したるさまなるべし

逢ふより顔を見ぬ別れして 全

逢ふよりのよりはきこぬがたしよりといふ天爾波は三例有りて其一は出

るよりといふ則内より外へ出る杯つかふより之其二はなくよりといふ則  
片方をさしかく意にて枕より又しる人もなき戀を杯つかふより之其三は  
まざるよりといふ則彼より是のまざるといふ意にて酸汁若い者よりよく  
なりて杯つかふより之此句の逢ふよりは三例の中いづれにもあてがたし  
猶後學者の考へを待つ別れして此別れといふ詞と別れ別ると下二段活な  
れど此句の如くしてといふ天爾波又てうくる時の別れは名詞になる之句  
意附意とも詳に解さるたけれ逢ひみてのちの思ひにやらふれ昔は  
ものを思ささりけりといふ古歌のうらにて逢ふよりも顔見ぬ別れのうた  
が後の罪なし杯といへる意にやあらんしからは前句のをかしくなりて笑  
ひ出しといふにこゝる通ふべし

汗の香とぬへて衣ととを殘し 大

此句もかへてにてはきこぬがたし疑ふらくはうへたの誤にや若然ら  
ば汗の香をかへたる衣をとり殘したるにて脱捨衣杯をとり殘し逃けか  
へり杯したるさまよて顔みぬ別れしてといふにうち合ひたり諸註此附意  
を或は源氏空蟬の意をとりたり或は世繼物語の平仲の佛或は枕草紙の詞

をとりたり杯いへともいづれもいさゝる似通ひたるこゝろ詞杯有るのみにてみる句の外の意味にて其替をこゝにひくべき必要もなきやうに思へばのせず

しきりよ雨はうちあけて降る 全

句意は解に及ばず前句汗の香なれば夏をこゝろにもちて急雨をつけたるなるべし

花さゆり又百人の膳たよふ 兮

此句といふやうにもさかるべけれどもまづ大家の花の宴杯なるべし附意の此數多の客まうけする中へしきりに雨ふりて混雜のさまならん

春は旅とも思をさる旅 全

思はざるのす有るの約り之附意の前句を旅籠屋杯と見立てたるなるべし

○ 珍頑丸 翁一 通路八 荷兮十 越人八

城下

鉄炮の遠音に曇る卯月おな 野 經

端書に城下とあるはいつくの城下ともさゝ定めかたけれと城下の景氣をいひたる故の端書と見て然るべし一書に端書はなくとも一句は濟み侍るよ似されども殺生ときこゆる時は風雅にあらす又田舎者の賭的ときいなされんもうるさけれをにや稽古筒の證にの書けるなるべし近年の句に人の親の焼野の雉子うちにけりなと見及ぶは風雅の罪人此上やあるべきといふ此説の如くあらば殺生の鉄砲賭的の弓焼野の雉子うつ句杯は一切なそべうらすみな風雅の罪人ときこゆるれと風雅はさやうな窮窟なるものにあらず殺生も賭的も人の上よ有る事なれば句にも作るべし其句にて人を泣かしむるも笑はしむるも作者の意匠たるべし若此論者の如くならば七部集中風雅の罪人擧て數ふべからすこは無用の辨のやうなれと初學びの人の若惑ん事もあらんとてしるしかく之○偕此發句の哉は名の哉にて曇る哉といふ間に卯月といふ名詞のはさみたる之句意は城下離れたる

稽古場杯の鉄砲の遠音きこえて薄曇りたる卯月の空の景氣なるべし

砂の小麥の瘦せをまらく 里東

鉄砲の音遠ひいきて曇りたる空に磯端のあれ畑杯見渡したるさまにて卯月に小麥と時候を合はしたるなるべし又はらくといふ詞はうごうざる故名詞にてとめたると同じ事也

西風にますほの小貝拾をせて 泥土

西風にふきよするますほの小貝拾りてるさまにて前句の砂の小麥を頓て浦邊となしたる也

あまぬるひとつ鯛ひぬねたり 乙州

たりはて有りの約り附意とあたりに小家もなき磯端杯にてなまぬるひひとつ鯛ひぬねたるさまならんか

碁いさぬひ二人しらくる有明に 怒誰

いさかひにしらくるといふ詞にかけて有明と作したるなるべし附意此し

らくるといふ詞にて鯛ひかねたりにひいかしたるなるべし

秋の夜番のものまうの聲 珍頌

秋は秋季をもたさんがためなり附意と前句を宿直杯とみたるよやあらん

女郎花心ほろけよおもはきて 筆

女郎花の名よりおほるほそげに思くるといひて前句の夜番の聲といふに通はしたるなるべし諸本おそはれてとなしたれど女郎花の豎はるいといふ事ときし得がたし一書に「源氏夕貞の夢に驚きてたぬいり玉ふ飾之」といひ又一書には拾遺の女より少將のもとへいひやりける人こゝろ丑みの今はたのましよ少將おとろきて返し夢に見ゆやと寐をときにける此連歌をとりて附けたりといふ若これらの註の如くならば此句の姿みるべからざるか

目の中おえく見やりぬちなる 野經

中うちとよむべしなるはに有るの約り靡なりの現在に活きたる之前句



と女郎花の心ばそげなる形容なればこゝには人のもの思ひしげなる形容をいひて對したるなるべし

けふも又川原咄とよく覺に 里東

川原咄は今いふ落語杯の前句を病める小兒杯と見立てたるあらん

顔のよおしき生きつきあり 泥土

をかしきとしき状なりは靡なり之附意前句の落語杯を十人の顔のをかしといへるなるべし此句打越に目の中有れば顔いかい又ありも打越になる有り

馬よめす神主殿とうらやみ玉 乙州

前句の顔のをかしき人の神主をうらやむ様にもきこゆれをさよめあらざるべし神官の装束つけて馬に乗りたれと顔のをかしきは生れつきなればせんやうなしといふ意にて前句の生れつきといふ詞を活かしたるならん

一里とろり山の下菊る 怒誰

山の下菊る里人等の馬に乗る神主をうらやむ田舎のさまなるべし

見しらきて岩屋に足もとめられす 泥土

こと山賊杯なるべし山の下菊られ見しられたれば足もとめられすと作したるあるべし一書には本食上人といひ一書には日藏上人の佛にて吉野山笠の篇といへども見しられてといひ足もとめられすとといへる詞によればさる人とはきこゆす

うれ世は泪雨としくれと 里東

雨との下になり時雨との下にもなりといふ詞を添へてきくべし句意無常迅速の觀相あるべけれど岩屋に足もとめられず狼狽したるをさとす意にてつけたるならん

雪舟に乗る越の遊女の寒さうに 野經

雨とまくれに雪を對したるにて雪舟に乗りたる遊女の寒さうに哀れなるさす前句よくひききたるなり

一歩にっあく丁百の錢 乙州

小商人杯の錢つなきつゝ雪舟に乗りたる遊女を見たるさまならん一書に北越の錢は丁百之といふ此句一文字一里に三句去之見わたしわろし御傘に一文字連に面に一つといわれれば併にと聲によみてもよみによみても七句去にすべしといふ

月花に庄屋をよつて高ふらせ 珍 頑

句意は解に及ばず附意よつて高ふらせといふ詞に錢つなくにひいらしたるあるべし此句の庄屋も遊女の打越いっゝ奉行地頭代官杯を非人倫となす説あれど句作によるべし此句の庄屋打越の遊女杯と人倫と定むべし

煮志めの塩のめらき早蕨 怒 誰

古代なる田舎料理のさまにさうして庄屋高ふらせといふに通はしたるなるべし

くる春よつきても都めすらす 里 東

都人の故有りて田舎にわひ住居なすさまあるべし則前句を田舎と見立てたるなり

半氣違の坊主泣き出ま 珍 頑

前句都の空のみ戀ひ慕ふ愛悶のこゝろやるかたなき人と見立て狂氣の如くなりたるさまをつけたるならん坊主の其人の姿をたてたるあるべし

のみよゆく居酒屋の荒の一躁 乙 州

前句を乱酔の癖有る人とあしたるなるべし此句又一文字四句去之

古きばくちの残る鎌倉 野 經

鎌倉は古き覇府なる故古き博奕のわざの残りたるさまなるべし附意の居酒屋のさわぎを頓てはくちとなしたるあり

時々ば百姓までも烏帽子にて 怒 誰

よてはにしての約りで有てといふ意之此句又古風の残りたるさまにて前句の古きばくちに通はし一句たけ高く作したるあり

配所と見舞ふ供御の蛤 泥 土

此句は淡路の癡帝杯をこゝろにもちて作したるならん時には土民も烏帽

子着て蛤杯を貢する孤島のさまなるべし此句の蛤は雜よつかひたる之蛤とばかりは春季ならざる事は上巻曠野集炭賣の卷に辨したり

たろぬきは船幽靈の泣くやらん 珍 碩

たろぬきは誰を彼れにて人顔もさだかに見わかざる夕暮の頃之此句のやらんは俗言よて古言には何や何らんとすべき例之則船幽靈や泣くらんとすべきを船幽靈の泣くやらんとなしたる之前句の配所の物凄き余意なるべけれと檀の浦杯をこゝろにもちて附けたるからんか

連も力もみふ座頭あり 里 東

力は強力といふ事にて荷持ならんうなりは願之此句いさゝか思ふ事有り連も力も座頭之といへばみな座頭といふ事ときこゆる之故にみなといふ詞にても文字を殺したる之都て天雨波の専用は片方をいひて片方を言外にさかそもの之此句の如きもは重ぬるもといふたとへばかうかいかいも櫛も昔やちり櫛といふ句の如きかうかいと櫛をいひて其他の装ひのみを昔なる事をさかしたる之此事は上巻曠野集月に柄をといふ巻くふ柿も又く

ふ柿もみな漉しといふ句の處も解きたれば見合はすべし但し此句のみお漉しのみなと座頭の句のみなどはつかひやうたがへば紛とすべあらず借附意は連も荷持もみか盲人にて心はそさといふ意にて船幽靈にひいかしたるあるべし

あら風の大岡寺繩手吹き透し 野 經

あら風は雨氣のぬけたる風ならんう大岡寺繩手と關より龜山の間ダイゴに有りとぞ附意は前句の座頭の一群の此繩手通るさまなればしさいなし

蟲のこいるに用叶へたな 乙 州

蟲のこはるは病の蟲にて服の痛む杯ならんこはるにののといふ意たきはし狀之附意はから風吹く繩手をゆき惱み蟲のこはれを用のあなへたきと思ふさまなるべし

糊剛き夜着にちひぎき莞筵敷たて 泥 土

本書御座と有れとも莞筵なるべし附意蟲のこわる人の居る莞筵なるべければしさいなし

夕への月に菜飯嗅き出ま 怒 誰

夜食の菜飯杯煮く香のするさまをかく作したるなるべし嗅き出すといひて前句を食客杯ときかしたるあらん

看經の嗽にまきる、咳氣聲 里 東

嗽は咳セキならん咳氣聲と風邪氣聲カサケとよむべきう附意は前句を供養の菜飯杯と見立てたるかされば此句と遷夜参りの僧杯なるべし

四十の老のうつくとき際 珍 碩

此句を以て前句の看經とる人を婦人よきかしたるに戀にあしたるこ

髪くせに枕の跡を寐直して 乙 州

句意解に及ばず附意も前句の人のなすさまなればしさいなし

酔と細目にあけて吹ぬる、野 經

る下のは靡之此句いさかこゆるゆかす窓杯を細目に明けて吹かるといふ意うれならば細目に明けて酔を吹かるとなすべけれと猶窓

とか障子とかいりではきし得がたし又目を細く明きて吹かるといふ意ならば細目よ明きてとけをさになさいればきこゆず附意は前句の寐たる人の酔さまさんと吹ぬるさまなるべし

杉村の花も若葉も雨氣つき 怒 誰

杉のむらたちたる中に若葉の花の咲き残りたる卯月の景氣なり附意と酔をふゐるゝ人のこの花を見えたしたるさまなるべし

田の片隅も苗のとりさし 泥 土

雨氣つきたる空に早苗のとりさしたるさまを舉白集に「顧る山田の原ははのかにて残る早苗や杉のむらたち」

- 野徑六 里東六 泥土六 乙州六
- 怒誰六 珍碩五 筆一

○ 雑

龜の甲煮らる、時を鳴もせむ 乙州

此發句脇句を諸註には吳志及び根本律の佛之といへば参考のため要を描て下にしるすと雖も句意は唯龜を煮るにて歌にも龜の鳴くといふ事はいへど烹らるゝ時は鳴きもせずといへるまでならん

唯牛糞も風のみく音 珍碩

發句龜の甲煮る臭氣のみにて鳴もせず物音なき体あれば爰に牛糞を吹く風の音となしたるからんか又馬糞にて物を煮る杯いふ事をこゝろにもちて作したるか○儲吳志といふは吳の孫權の時永康の民山に入て大龜を得これを吳王に獻らんとて行て越里も船を繋きて泊る夜中岸の樹龜を呼て日勞する哉元緒何了然るや龜答て曰我狗繫せられて將に烹られんこれ何ぞ恐るゝに足らん南山の薪を盡すとも我を潰する事能はじ樹曰吳には諸葛元遜有り必我等の如き樹を求めて烹ん龜曰多くものいふ事なかれ禍汝も及ばん樹則獸す遂にこれを獻す孫權命してこれを烹さしむ薪萬車も及ふと雖も猶元の如し諸葛恰を呼てこれを問ふ元遜曰老桑を伐てせば忽解

んと又獻する人龜と樹との問答を語る則其樹を伐らしめて烹るよたつとこゝろに解くとぞ○又根本律に或池に二鶯一鼈住むたま〜天大旱して水皆乾く二鶯他へ移らんとす鼈曰舊交を捨てず翅無き我を助けよと鶯一枝をとりて其中間を鼈に銜せ二鶯兩端を咬て飛行く人見て曰二鶯共に一牛糞を銜へ飛ぶと鼈牛糞にあらずといひ口を開きて則落つといふ

百姓の木綿志まへは冬の来て 里東

畑綿しまへば頓冬の來たる之木綿をもめんといふはくの省かりたる之木綿にて織りたる布をいふ此句にはきわたとよむべし附意は牛糞に風の吹くを初冬の畑となしたる之雜の卷は第三にて季を定むと諸書にいふ但し定まりたる法にはあらざるべし

小歌ろろふるむら白の繩 探志

小歌うたひつれて米つくさまなるべしむら白の繩は天井より下げたる力繩といふもの之とぞ附意前句は百姓のさまを他より見たる意ある故爰に其季候を合とせ酒造の元米杯つくさまならんか但し句の表に季はなけれ

ば雑之

獨寐て奥の間廣き旅の月

昌房

句意は解に及はず附意は前句を大家と見立て其家に舍りたる客なるべし

蟪蛄落ちてきゆる行燈

正秀

句意解に及はず附意は前句奥の間廣きといふを古屋敷杯と見立てたるなるべし

秋萩の御前に近き坊主衆

及肩

庭園に萩の咲きみられたる寺からん萩見のために御前の成らせられたるにて常と坊主衆の御前に近づく事杯はなけれどけふは近くゆさるゝ杯いふ意あらんされば附意は草ふかき寺にて天井より蟪蛄の落ち杯する事も有るさまなるべし

風呂の加減の静あまけり

野徑

前句の御前のめさせらるゝ湯殿にて坊主衆の加減を伺ふさまを加減の静なりけりといひたるあるべしなりけりは有る事ぢやといふ意之解前に

見ゆ〇一書に獨り寐てといふ句より此句まで四句を隔連附の傳杯といふ

こは辨するに足らざるひがごとなれども若初學びの人の惑はん事有らんを恐れ左に全文を引て愚考を述べん日本式千句第二卷目に隔連附二ヶ所必有るべし是則隔連附の傳にして大切の事之夫をかりに附け合せたる之長句と長句とを附け短句と短句とを附くる之奥の間に御前行燈に風呂すべて傳授口決あくして解せん事潛上の沙汰之と見ゆ本式千句第二卷目いとまれかくまれ芭蕉門の俳諧には打越に意のもゆるをこそさらへ隔連杯といふ事はさらしくかし又獨寐て奥の間廣き旅の月に秋萩の御前に近き坊主衆といふ句あつづくべきかつくべからざるかいかあるか學びの人の見てもしるべし又行燈の打越に風呂は野徑のしるんじあるか誤寫かなるべし又傳授口決なくして解せん事潛上之といへば解し能はざる程あらば作する事と猶能とざるべし昌房正秀及肩野徑の四哲は誰人に傳授しるかしらされど無傳授の人は此俳諧の連衆たる事能はざるへし若俳諧に斯の如き法有りとする時は御傘も新式も廿五條も一切用ゐるべからず

鶯の寒き聲にて啼き出し

二嘯

此句のにてと俗言のぞといふ事を古言の如くにてといひたる之附意は湯殿に驚きたるあるべけれと寒き聲といひて静なりけりに通はし余寒の趣きこゆる

雪のやうなるおますこの塵 乙州

やうは俗言之古言あらばと又とくといふ時はし状之の白き塵のますとにまじりたるさまあるべけれと雪のやうあるといひて寒き聲も通はしたるなるべし

初花も雛の巻樽居えあらへ 珍碩

巻樽は一書に重輪之といふ前句かますとあれば田舎の雛遊びあるべけれと初花は雪のやうなるといふ詞にひいたるべし

心の底も戀ろあまける 里東

戀ぞは中のぞにてけるとうち合はまたる之前句初花の句はしきも雛の塗樽杯あらへたるさまに起請して戀になしたるなり

御簾の香にふたるとあひし笛の役 探志

御簾の香は簾の中にははしく奥床しきなるべし笛の役は能役者杯なるべしこゝろのうち戀ありて御簾の中にのみ心の通ひて役目の笛をふきろこなひしさまになしたる附之

寐言も起たて聞けを鳥鳴く 昌房

人の寐言に眼をさまし聞けば鳥なく曉あるべし附意は前句ふきそこなひしのしと過去ある故囀の役の笛ふきそこなひし無念やるゝたなく寐ても安ららず寐言いひ杯するさまなるべし一書に聞けをば聞いたからといふ意之とて聞くにも直またれと聞けばは已も聞きたる意にて聞かばは將に聞かんとする意之あ緯は未然段之緯は已然段なる事凡例の中に圖を示したり

錢入の中着提けて月にゆく 正秀

句意は解に及ばず附意は朝まだきより月見にゆくさまなれば聊きこゝろがたきやうなれと程隔たりたる名所杯の月見にゆくさまなるべし

未だ上京も見ゆるや、寒 及肩

や、寒は秋風の漸寒さ之嫩寒新寒初寒早寒杯みな同し此句見ゆるといふ  
詞もや、寒とつづく時はさし得がたし前句の月にゆくといふ詞にあた  
りて未だいく程もゆかすといふ意を未だ上京も見ゆるとなし漸寒は秋季  
をつれたるなるべし

蓋よ盛る鳥羽の町屋の今年米 野徑

蓋よかさと訓を今年米を蓋よ盛るといへば焼米杯よや附意は京見物杯の  
さまなるべし

雀と荷ふ籠のち、めき 二嘯

ち、めきは未だ詳にせざれどち、めきはち、めきと活らく詞の如くさこゆ  
る一書に鷹の餌の雀の鳴さち、めきはさわくをいふといへども前後の句  
に鷹の意なし鷹の餌には限らず鳴ささるをち、めきといふにやあらん  
猶後學者の考へを待つ附意は前句米なれば雀となしたるなるべし

うす曇る日はとんふと霜おれて 乙州

霜おれと霜ふうき朝其儘曇るをいふ薄曇る日影の鈍みりとしたる霜をれ

の空といふ意なるべし附意は雀を荷ひゆく道杯の朝のけしきをいひたる  
のみにてさして解を用ゐる處かからん一書又此句を鳥とるさまとなして  
註解したれど此句には斯の如き余意なし

鉢いひあらふ聲の出ぬる 珍碩

鉢いひあらふは初て托鉢に出てたる僧にて其聲の出でぬるさまなるべ  
し附意は霜をれの寒さ朝まだきより修行に出たるさまにて打越の雀荷ふ  
たる人此句と托鉢の僧之景氣の句を人情の句にてはさむ時と斯の如きは  
こびになる事とまゝ有れども面白からず

染めうき木綿袴のぬすみ色 里東

染めてうきは花やうなる色なれと嬉しくも有るべけれも鼠色の詫しき梵  
衣なれば愛きといへる意よて前句を初發心の尼杯と見たてたる附意ある  
べし但し此袴は前句は雜後句は冬なれば夏と定むべし

撰りあまされて寒きあけほの 探志

同輩の中に撰りあまされて留主も、杯する淋しきさまを寒さと作して前



句のうき裕といふに通はしたる附意なるべしされば此寒きは前句の裕と  
あたりたるなれど此句のみ離す時は冬季勿論之同季は五句去なるに霜を  
れに二句去之板行になす時の誤寫なるか又は鹿漏なりしかいづれにもあ  
れ龜鑑とはあすべからず

暗めまよ樂鐘の下ともやしつけ 昌房

然やしは然の然ゆと下二假に活く詞をの緯に活かし令の字の意なるしを  
添へて然やしとなしたるにておのづから然る詞をみづら然あす詞にあ  
したる之解は冬の日こからしの卷其他處に有り附意は撰りあまされて  
寒き曉にくらがりにて曲突杯たきつくるさまなるべし

傳馬と呼もる我あまを口 正秀

呼ばるのるは被の字の意にて呼ばれるときくべし前句を馬士の家杯と見  
立て朝またきより曲突杯たきつけ居る處を外より呼ばるゝさまあるべし  
いまりたるは勇みたるにて威光ふる杯いふ意あらん鎗一筋つかし挾箱も

いきまたる鎗一筋は挾箱 及肩

たしてありく程の武士杯なるべし附意は前句の傳馬を東海道の驛杯と見  
立てたるならん

水汲みあふる 鯉棚の秋 野徑

こは活けたる鯉あるべし棚と店ならん鯉棚の下は涼しき杯いふ意を含み  
たり附意は鎗一筋に挾箱の武士杯の多く往きかふ賑はしき町にて店先に  
鯉いけ杯したる家のさまなるべし

さあくと切子の紙出に風吹きと 二嘯

紙出の切子燈に提けたる紙の垂あるべし附意と前句の魚屋の座鋪杯に鉤  
りたる切子の見ゆすきて涼しきさまならん

奉加の序にもほのある月 乙州

奉加の序は奉加帖の序文ならんほのかなるとに有るの約り靡ありの現在  
に活きたる之本書に成の字を書きたるの誤之附意は前句の切子を寺杯と  
見かへたるあり

食物に味のつくところ嬉しけれ 珍碩

此ころいわたるころにてけれとうち合はしたる之附意は前句の奉加帖く  
り廣げ居る人にて夏中病みをりしか秋風たちてやよくなり喰物にも味  
のつきこゝるもそこしまめになり杯したるさまなるべし

煤をくうちを次み居ぬる里東

句意解に及ばず附意も前句のや病みあがりの人のさまなるべければ解  
を用ゐず

目とぬらす禿のうろを取あけて探志

此句の附意は前句を煤掃くせわしき頃をも旅舎遊廓杯に遊ひ居る富有の  
人杯と見たてたるからん本書禿のうろにとあれをの誤ならん一書に腔  
に取明てとあして禿の泣くく来て今勝手にて煤が目に入りたり爰も只  
今掃き申せば暫の間居かはり給へと申しければ予も煤かけられたら泣か  
ずばなるまいいざ明けて掃かせんと腔の調子を合はしけるはをかしとい  
ふと雖も前句に煤はくといふ言葉有ればこそ座敷杯を明くるやうよもさ  
かばさかるべけれ此句のみ離す時は何を明くる事ともさし得べからず若

此解の如くならば二句一意よして此句と一句たはず

戀よむあれた最上侍昌房

最上は羽前國之前句禿の腔をしりながらとりあげたるさまと見立て戀に  
のりたさとなしたるなるべし最上侍と寓言のみ

手みしめに手拭ぬちて腰よと正秀

句意解に及ばず附意は前句の田舎侍のさまなるべければ又去に支度杯す  
るやうにもさこゆるなり

繩と集むる寺の上茨及肩

上茨は屋根を茨く之田舎寺の普請にて前句を繩を集る人となしたる之此  
句上茨の上の字打越に最上の上有れども同字別腔なる故嫌はず

花の頃晝の日待に節あ着て野徑

日待は日祭杯なるべし節とは節衣にてよき衣といふ意ならん花の頃節衣  
着うざりて日待なす花やかなるさまを前句の寺に對したる附意ならん

さ、らに狂ふ獅子の春風 二 嘯

獅子の下にいささきよき杯いふ詞をふくみたり獅子頭の舞ひくるふさま  
前句の花やうなる姿によくあひたるなり

- 乙州四 珍碩全 里東全 探志全 昌房全
- 正秀四 及肩全 野徑全 二彌全



○ 田野

晴道や苗代時の角大師 正秀

晴道ハレミチやは冠のや、角大師は元三大師之こは苗代田のはどりに元三大師の  
像を竹にはさみ杯してたて有るさまなるべし處によりては水口祭ミヅグチに元三  
大師を祭るにや又呪杯のたぐひならん

明れば霞む野鼠の顔 珍碩

此明ればは夜の明ればとさくべし晴道の角大師の札たてたるはどりと野

鼠の夜の明けてうるくするさまならん霞と春季をもたさんがためなり

鶯ふとのまやくに鳴たし春の空 全

鶯ウグイス太は鶯ならん鳴きしのしは過去ある故鶯のわやくに鳴きたりし後の空  
といふ意にきこゆれと句者と現在のつもりならんか現在ならば鳴ける杯  
とすべき之附意は脇句夜明のさまなれば鶯の鳴たつるとなしたるなるべ  
し第三とまりに天雨波を用ゐざる事は上巻に辨したればこゝにいはず  
と初學ひの輩はみだりにまねふべからず此句の如き功者の作なれどや  
い平句にまぎれやすし

あましき門口の文字 秀

をかしきはしきシキ状この異やうのかまへなしたる家なるべし門口の文字は  
表札杯ならん此句の附意の如きは唯此家の空に鶯の鳴たつるさまにてさ  
して解を用ゐる處おし此前句の如く唯鶯の鳴く空といふばかりなる次の  
句は大体かやうの附になれと今すこし親しく附くる考へも有るべし但し  
此句をあしといふにはあらず

月影に利休の家と鼻にうけ 全

利休の家は利休の邸宅なるべければ古人を現在に作したる之鼻にかけは解しがたけれど里俗に跨る事を鼻にうけるといへばそれらの意にやあらん附意は前句と利休の家をかしたるなるべし表に人名よるしゐらず今の俳諧にはまねぶべからず

度々等然えらなる、あり 頌

もらはるゝのると被の字の意にてもらはれるといふ俗言にあたる則もらふ人を敬きていふ詞となりと末なりにてはいといふ意之こと前句の利休の家より我が畑の芋を度々もらはるゝといふ附意ならん

虫をみあつ、れくと鳴くやらん 秀

やらんは俗言之古言には何や何らんとすべき天爾波にてつれくとや鳴くらんとする之前にも解きたり附意の芋畑杯の虫をつれくとや鳴くらんと詠めたるさまあるべし

片足くの木履たつぬる 頌

脱ぎ捨ての木履の片足くまなりたるをたつぬるにて夜ふけて人のあへるさま杯にきかし前句の虫に通はしたる附意あるべし重字三句つゝきたり二句はそべし三句はそべからず

誓文と百もたまたる別路に 秀

遊女のきぬく杯のさまよて前句の片足くまの木履たつぬる人を去ぬさまに見立てたる附意あるべし但し別路よのよは前句にうち合ひたるなり

あみたなくみ多り供の侍 頌

此句のけりは前句のににうち合はしたる之前句の別れ端の情のせつなきを傍に居る供の侍もともに泪ぐみしさまの附意あり諸註源氏須廣の巻の佛といふいさか似通ひたる處もあれど次の句に須廣といふを以て斯く解したるなるべし

須磨をまた物不自由ある臺所 秀

物不自由なるはに有るの約り靡なりの現在に活きたるこは平家の須廣に移りたる杯の佛のやうにもきこゆ盛所の不自由なるに供の侍も泪ぐみしさまならん

狐の怕る弓ぬりにやる 頌

此句本書には恐ると有れを恐るは恐るゝと靡かざれば弓といふ名詞についのす仮名にておづると有りしを板行の時恐の字をあてたるならんか又元より誤りたるうもしるべからされを意たがふ事なければ怕ると改めたる之附意は盛所も不自由ある淋しき處にてをりく狐杯の來れば狐をおどす弓かりにやるさまあるべし

月氷る師走の空の銀河 秀

凄しき寒夜の景氣をいひて前句の狐にうち合はしたるよてしさいなし

無理もすゑたる膳え進まず 頌

この病者杯のやうにきこゆれを此句の表は病む人を介抱する意にていかにかなしても喰はさんと心を盡くし無理にすすたる膳もすゝますと歎

くさまならん孝子杯のやうにもきこゆる之附意は月氷る師走の寒き夜を寐す看病をすさまなるべし

いらぬとて大脇指もうちくれて 秀

とてはといひての約り之大脇指ものもは何も何もとつかふもなる故大脇指の外の物もうちくるゝさまにきかす天爾波之附意の前句を意に違ふ事のみうちつゝきて浮世に倦んじ果てたる人杯と見たてたるならん

獨ある子え矮鶏にかへける 頌

此句の何も何も何もとつかふも之けるはけりの現在に活きたるなり獨ある子も矮鶏にかふるといへば其他の物の何も彼も無くしたるやうにきこゆるなれを子を矮鶏にかふるといふ事は何かの物語談杯に有るにや未だきかず句意を獨有る子もなくし何も彼も放下したるにて前句の余意ならんかと考ふる之一書に前句大脇指も何もいらすと子にやりし樂隠居と見立て其境界の噂をつけたり隠居へ連れゆきし末の子の成長しければ養子に片つくとて其子に脇指も何もかも皆つかはし其養家と矮鶏の居るを

貫ひて遊伽に飼ふを人の見て一人子を矮鶏にかへしと戯に樂隱居の噂するさま之といふこはあまり迂遠なる解のやうに思へど参考のためしるしおきて猶後學者の考へを待つ

江戸酒と花咲く度に戀しめり 秀

江戸の人の久しく他國に在る趣にさこゆれば前句を酒癖にて何もかも失ひ終に江戸の住居もならず田舎杯に居り花咲く頃は古郷の江戸の戀しくなる杯のさまなるべし○無理にそゑたる勝云々の句より此句まで四句の間注解のくだくしくなりたり元より述者の欲せざる處なれど此四句はいづれも聊遠き處よりつけたる故斯の如く解せざる時はさくがたしされど必愚解の如しといひ定めたるにはあらず猶他にさくやうも有るべけれど一に此解になつむべからず述者はやむを得ず想像の解を下たしたるこ

あひの山彈く春の入相 全

あひの山は唄之一書に此唄に諸行無常の鐘の聲聞て驚く人もなしと有りといふ附意は花に春の入相なれをまさいなしといへども伊勢あたりよ在

て江戸の酒を戀しがるさまにもさこゆるこ

雲雀啼く里は厩糞あきららし 碩

厩糞は本書まやこねと訓したりあひの山彈きて戯るゝ座敷杯より馬糞かきららす畑を見わたしたるさまの附意なるべし雲雀は春季をつれたるなり

火と吹き居る禪門の爺 秀

禪門の爺は居士杯いふ意にて僧にはあらざるべし附意は馬糞かきららす畑のはどりの草菴杯のさまなるべし

本堂にまた荒壁のましら組 碩

寺院の普請中なれば前句の居士を寄進所杯に火を吹き居るさまになしたる附意なるべし前句には草菴と注し爰には寄進所と注するが如きは當を得ざるやうなれどいづれも句の裏に有る事なれば前句は唯火を吹き居る爺此句は唯普請中の寺にて草菴と寄進所は注解の道具に用ゐたるなり

羅綾の袂とほりたまひぬ 秀

たまひぬは去ぬのぬ之解前に有り附意は前句は兵火杯に亡びし伽藍と見  
立て其寺にゆかり有る宮方杯のやうにさかしたるならん此句は猶他よ  
もさしやう有るべし

齒と痛む人の姿を繪にぬきし 頌

こは西施患心杯いふ事を一轉して齒を痛む人の姿と作したる俳言にて美  
人の畫ならんかされば此畫を以て前句の貴女にひし加したるならん

薄雪たぬむ芒瘦せたり 秀

此句の語路聊こゝるゆかす板行の時の誤寫もやあらん薄雪にたぬむと  
か瘦せたる芒たぬむ薄雪とかなさではきこぬがたし附意は繪をかき居  
る様先杯のさまなるべけれと瘦せたる芒のたぬむといひて齒を痛む人の  
姿といふにひし加したるならん

藤垣の窓に紙燭を扶みぬき 頌

藤垣の窓は藤もてあみたる窓ならんか附意は薄雪のかゝる芒の野中の花  
杯にて窓に紙燭はさみぬきて何かなし居るさまなるべし

口上果をぬいよさまの時宜 秀

時宜は辭義ならん附意は窓に紙燭はさみたるを客を送りて出たるさま杯  
に見立てたるなるべし

たうとげよ小判ろろふる草袴 頌

尊げのげはさうにといふ意之たうとさうに小判かぞふるといへば草袴は  
山家杯の人のやうにきこゆる之附意は去にさまの口上の果てぬを小判請  
取りてかへるか持て来てかへるか杯のさまになしたる之

秋入初むる肥後の隈本 秀

秋入初むるは秋の収入ならん肥後は米處なる故小判杯扱ふさまにさかし  
て前句に通はしたるなるべし隈本は今熊本に作る

幾日路も管し月見る役者船 頌

役者船は旅役者なるべし附意は肥後の隈本に船路なればしさいなし

素布子ひとつ夜寒ありけり 秀

なりけりは靡なりにけりをつぎたる之解前に有り附意は前句の船中のさま  
ま之但し前句は船中に幾人か乗りくみ居るやうにさこゆれとこには其  
中の一人の事をいひたるなるべし

澤山に元めくくと叱らまゝ 頌

元めは頭杯の元げたるを元めくと字の如く澤山さうに呼ばるゝさまに  
て鍛冶か桶屋杯の丁稚のやうにもさこゆる之則前句の素布子ひとつの人  
なるべし

呼ひありけとえ猫をぬらす 秀

附意は前句の元をして猫を呼びありかしむるさまなるべけれと猫を愛す  
る事の人にも過ぎたる人のやうにさこゆれを嘲諷諫の意をふくみたるか

子規御小人町の雨あめり 頌

此句子規カキノギの下に啼くと添へ雨あかりの下ににを添へてさくべきなり附意  
は猫呼ひありき御小人町に來たり思ひもよらぬ子規さしたるさまなるべ  
し

やとほの楓木の芽萌はたつ 秀

やしほは八入ヤシホにて色の濃きをいふ御小人町の植こみ杯なるべし前句子規  
なれば若葉ともすべきを一轉して木の芽となし春季ようつしたるなり

散る花に雪踏ひきする音あまて 頌

雪踏は一書に千利休茶の會の草履に雪をいとひて牛の皮をつけてはきた  
るより始まりたりといふ又大閻秀吉公北野にて大茶湯を催されし事有り  
舉句北野北馬場といふより雪踏と北野の二句の間に茶湯をもたしたりと  
いふ或は然らんか前句楓の木の花もはたつといふに花は散りかゝるさま  
なればさして解を用ゐるに及ばず雪踏はいかやうにもさくべし

北野の馬場にえゆる陽炎 秀

附意散る花にかけろふなればしさいなし但し陽炎のもゆると木の芽のも  
はたつと事がらはかはれども打越はいかゝ今の俳諧には用捨有るべきな  
り

正秀十九 珍頌十七



敬養集 卷之五

卷之一より四句まで發ある故茲にこれを略し別に發句はるりを集む

鳶の羽え刷ひぬまつしくれ

去来

鳶の羽ものもは何も何もとつかふも之故に諸註此もにつきて人の袴かき  
繕ふ余意有り又は他の鳥の羽を刷ふ余意なり杯とさまぐにいへり此も  
文字は上卷に解し如く正面の事物を句の外にきかす天爾波なれども此句  
には此も又て初しくれの初の字を活かしたるならん則も羽を刷ふとい  
ひて初しくれの初めて寒く初めて淋しといふ意をきかしたるなるべし  
もなき時は初しくれといひたる初の字の詮なかるへし若も諸註の如くなら  
ばも羽もかいつくるへる時雨哉もでもなきべき之但し愚解にも羽を  
とも文字のおき處をかへたるは解し易からんがため之も羽をとなすも  
鳶の羽もとなすも文字の意たがふ事なし刷カキひぬのぬは去ぬのぬ之解前  
に有り

一ふき風の木の葉しつまる

芭蕉

風ののの意をふくみたり風の烈しき杯ときくべしたとへば梅の家は梅の有る家露の家は露の深き家杯の如し附意は發句を森林杯と見立て一ふき烈しく木の葉散りしく風のしつまりて頓て時雨るゝさまなるべし此附けやうを一書に此脇は發句の前をいふたるといふ都て附句は處よりよりて附くる句が過去になり前句が現在になる事はいくつもあるべし此脇は動詞にてとめたる之則静まら静まり静まる静まれと四段に活らく詞の斷止段にて静まるととめたる之若これを續用段にて静まりとなす時は脇体にならず動く詞にてとむる脇此句に準らへしるべし

股引の朝ぬらぬる、川とほろ 凡兆

朝からは俗言之古言ならをよりととなす處之此句は股引の濡るゝ川を朝から越わてときくべし附意は吹きあれては静まり静まりてと吹き杯する冬の空に朝から股引濡らして淺川渡るさまにて發句脇景氣なれば第三に人情を起こしたるなるべし

狸杯おとす篠張の弓 史邦

篠張は篠をためたる弓にて前句を枯芒原の淺川杯をかち渡るさまと見立て狸杯をおとすために篠張の弓持ちたるさまなるべし

まいら戸に蔦這ひらゝる宵の月 蕉

玄關杯の戸よ蔦のはひかゝる古屋敷なるべし夜は狸杯のしばゝ來れば篠張弓杯用意したるさまにてあれ果てたる山家のやうにきこゆるなり一替に蔦の影の戸にうつるを這ひかゝると作したる之といふこは月といふより斯く解したるなるべけれと影うつるときゝては藤杯のやう之又一書に朝と宵との打こしを咎めたれと第三の朝は曙之殊に時分の打越は朝時分と夕時分とかはりたれば強て咎むべからずこれを強て嫌ふ時は季ばさみなすべからざるに至るべし

人にもくます名物の梨 来

こは前句の家の軒の妻杯によき梨の有るさまならん人にもくれずは俳言之一書に徒然草の菴の彼方の庭に柑子の木の枝もたわゝになりたるを廻を殿しく圍ひしころ此木なからましかばといへる俳之といふ又一書に倍

喬坊杯といふは此句を賤しくなしたる也

あきあくる墨繪秋暮まで

邦

こは食客の畫工杯からん前句の人にもくれずといふを戲言と見立てかき  
なく墨繪といひて戲畫杯を以て前句にひかしたるなるべし

もぎと、るよきめりやすの足袋

兆

莫大小の足袋元祿の頃有りし物と思はる前句秋暮れてといへば其時候を  
つけたるなるべし但し此句は冬季なる故季うつりなり○此句につきて聊  
辨る事有り目今の老俳達に今時の事物を採て附句杯にする事を甚いじ  
人も有り雖も俳諧の附句を二千年三千年昔の事物を現在のさまに作する  
とも目今の事物を其儘採て用ゐるとも自在あるべし則春の日伊勢叢の巻  
初裏に「文王のはやしにけふも土つりて」といふ句の如きと外國の昔を現在  
のさまに作したる又此莫大小の句の如きは漸元祿の頃世に行はるゝ物  
を採て用ゐたる之然れども明治の初年よりの流行物は外國の物多く殊に  
無量の數あればそを何も何も採て用ゐる時は雅意を失ふ事有るべけれ  
ば用捨すべき也

何事元無言の中はしつゝあり

来

ありは靡なり之此句聊こゝろゆかず無言の中は靜なる事は當然あればい  
かある余意有りともき得がたし強て解く時と頓てさわがしくなるべき  
意をふくみたるかされば前句を今様の形したる若き者杯となし何か制せ  
られし事杯有りてまばし無言で居るさまか諸註此無言を禪僧修驗者杯と  
すれどいづれも前句に縁なし猶後學者の考を待つ

里見はそめて午の貝ふく

蕉

午の貝は午時の貝にて山家杯のさまからん前句を無言にて歩行くさまと  
見立て人里見ぬて午時の貝聞くなるべし赤染衛門の歌にけふもはや午の  
貝こそふきつなれひつしのあゆみ近つきぬらし諸註峰入の下山といふ

ほつれとる去年のねごとのことゝるく兆

したゝるくは諸註垢染み汚れたることいふしたゝるまきくと活らく形状  
言のやうにきこゆ此詞まはとけくの誤にはあらざるか狭衣に高野まうて  
よし野川かいかしづくいとしほとけしとみゆ此詞はぬれまはたれたるさ

まにてしはどけしきくと活らく形状言之句意は去年の寐莞蔭のはつれし  
はたれたるにて午時の貝杯ふく山里のさまなるべし

芙蓉の花のまらくとちる 邦

芙蓉諸註に蓮之といふ前後に秋季なければさも有るぬべし然れども塔山  
井にも芙蓉を秋季とあしたれば蓮ならば蓮と替く方よかるべしまをらく  
本書の儘になしおく附意はまはたれたる寐をさ敷きたる古寺杯の庭なる  
べし

吸物を先出来されしすいせんし 蕉

出来されのれは被の字の意にて敬きていふ詞之出来されしは過去のし  
すいせんじは昔之肥後熊本江津川上水善寺の池より出る名物之附意は蓮  
見の客のもてなしなるべし

三里あまりの道おへける 来

けるはけりの現在に活きたるといふ事は前に度といひたれどけるとけり  
との差別は此句にて了解すべし此句は今より三里余りの道をゆかねばな

らぬといふ意なる故かへけるをかしたるにて此句をけりとはいか程初  
學びの人にてもなすべからざらん此理をかしてけりは有り過ぎし事をい  
ふ天爾波けるは現在の事をいふ天爾波ければむかふへかけていふ天爾波  
たる事を明らかにする時はかりたり杯都て有り狀の詞に通すべき之  
偕此句の附意と前句のもてなしに際とりたりし杯をかしたるなるべし

この春を盧全が男居なりよて 邦

この春もは去年の春もといふ事を句の外よきうしたる之盧全は唐の茶人  
之此句は盧全が如き茶人に仕へ居る僕なるべし居ありは出代をなさず居  
る之居なりのありは俗言にて古言にはまといふ意之にていで有てとい  
ふ意之諸書此句を盧全が如き人の一僕を連れて遊山なすさま又解くと雖  
も然らざらん此句は盧全が僕之殊に前句も用を帯び居る意あれば遊山に  
てはつきがたし此句の男の主用を帯びて三里余りの道へへけるさまな  
るべし

さし木つきたる月の朧夜 兆

たるはて有るの約り之附意は前句の居ありの男のさしたる木のつきたる  
さまあるべし月の朧夜と春季をつれ且初衰ウツの月此句まで出でざる故花前  
にて月を出したるこ

苔あから花にあらふる手水鉢 蕉

ながらこさじおくまじき事を其まゝさしおく意をさかそ天爾波なれば此  
句の如きは苔を洗ひ落とすべきなれを其儘花にならぶるといふやうにき  
こゆれどさにあらずして苔のつきたるを殊更に愛で、其儘花にならぶる  
なるべし斯くさしてもながらの本義はたがふ事なし附意は前句庭先のや  
うに見ゆれば其あたりの花と手水鉢なるべしかく解く時と二句一意のや  
うなれを前句は一句になす時は庭とも園とも畑ともなるこ

ひとり直りし今朝の服とち 来

此句のひとりオソカサは俗言にして自然オソカサといふ意之直りしオソカサのしと過去之下に今朝  
の服たちといへば正しきつゝのひさま之附意を慰み又庭繕ひ杯して今朝の  
服たちの自然オソカサに治りしさまなるべけれと此句を一癖有る人のやうにさる

して苔あから手水鉢を花にならぶるといふ意にひゞかしたるあらん

一時に二日の物を喰へ喰ておき 兆

一時に二日の物も喰ふは常の人にあらず此唯人ならざるやうにきこゆる  
處を前句の一癖有げなる意に通はえたるならん一書に前句を大量の人と  
見て大服をつけたりといへと前句は癖有る人として見ゆれ大量の人とは  
見ゆべからず

雪けに寒た嶋の北風 邦

雪けは雪氣よて冬季之雪解とまかはすべからず附意島にて使役せらるゝ  
人杯にて喰物も自由あらざればよきをり又は二日の物も喰ひおく杯哀を  
るさまなるの又船乗杯やうにもさかるれとこれにては寒き北風といふ詞  
の活きうすからんか

火とえしに暮るまを登る峯の寺 来

暮るればといふ詞は暮れたによつてとさくべし暮は暮れ暮ると二段に活  
く詞よて暮るにるを添へて暮るとなす時は下のると靡ナヒキ之此るのれに活

きたるにてるハ断止段れば已然段之已然段のれにばの添ひたる故たによつてといふ意になる之暮れなば登らんとといふ反對なり則なむは未然段之上卷凡例の中見合はすべし附意は島山の寺にて常夜燈杯あるべし

ほと、きすみな鳴きしまひたり 蕉

附意と峯の寺に郭公なれをしさいなし一書に此句のたりをけりと改めたりしとことわりけりとなして注解したり其故を明かさずと雖も推し量るにたりにて有りの約りなる故鳴きしまひて有りにてはこゝろゆかざるやうに思ひたるならん此たりはて有りなりは有り杯の有りは物の有無につきたる有りにあらず有り状といひて形状言之則有るなりは有るに有り無きなりと無きに有り亡びたり失せたりと亡びて有り失せて有り杯の如し漢字になつむ時は國語を解し誤る事まゝ有るべし

瘦骨の未と起直る力あき 邦

未だといふ詞にて病後の人と決すべし附意は郭公鳴きしまひたる朝のさまなるべし

隣とありて車ひきこむ 兆

此車は荷杯運ぶ車にあらず人の乗りたる車なるべし前句を獨居る人杯と見立てをりしも訪ひ來る人有れと起き直る力さへなければ隣をかりたるさまならん一書に源氏夕顔の卷の傍之といふ

うき人杖積殼垣よまぐ、らせん 蕉

うきと憂しきくと活く詞なれ此句には恨めしき杯いふ意あるべしくいらせんは未來の詞之うらめしき人なる故針有る杖殼垣くいらせてのらきめみせんといふ意にさゝしたる俳言之附意と前句の車の人なるべし

いまや別きの刀さし出す 来

いまやのやと疑へ出すの下にらん杯いふ天爾波を添へてさくべし前句をさぬくの別れ杯と見立て預けたる刀を今やさし出すらんと待つさまならんか一書に忘れたる刀之といへども前句くいらせんは未然の詞なる故意うちあとす

せめしけみ櫛てめしら杖あきちらし 兆

ここ乾女杯にて今や刀さし出すらんと待ち居るに櫛て頭かさちらし居る  
さまならん逆附杯いへる附方なるべし

思ひきつたる死よくるひ見よ 邦

見よの上と詠へのよ此よは前にも解きたる如く向ふのこゝろつかざる  
處をさす意なる故此句の如きものなたはさは思とさらめと我は已に覺  
悟きはめたれば其死にぐるひ見よといふ意之附意は前句のせわしげとい  
ふ處をとがめ狂女杯となしたるあらん

青天よ有明月の朝ほらけ 来

青天はあをろらとよひべし附意は前句を武者と見かへたるならん夜もす  
がら戦ひ勞れ今は是までとて戦死の覺悟とさほめ空見やりたるさまある  
べし但しこは前句につきての注釋にて此句のみ見る時は唯朝ほらけの景  
氣なるなり

湖水の秋の比良のまつ霜 蕉

比良に初霜おきわたしたる暮秋の景氣之前句の有明を九月の末となし朝

ぼらけに霜をつけたるなり

柴の戸や蕎麥ぬすまれて歌枝よむ 邦

柴の戸やは冠のやぬすまれのれは被の字の意之附意は初霜に時候をあ  
はしたるにて蕎麥ぬすまれし畑に初霜見るやうにもきこゆる之歌をよむ  
は一書に澄惠僧都乃坊の隣の家に畠の蕎麥を或夜盗人のひきて取たりと  
聞きて盗人は長袴をや着たるらんろはをとりてろはしりさりけるとよま  
れし俳之といふ

ぬの子着あらふ風の夕くま 兆

布子着ならふは着なるといふ詞を裏になしたるにて曠野集深川の夜の  
脇に酒しひあらふこの頃の秋といふが如し附意は蕎麥盗まれし柴の戸の  
寒げあるさまなるべし

おし合ひて寐てを又たつらまくら 蕉

講中同行杯のもの参りの多人數の旅にしてこの旅人の布子着ならふさま  
あるべし

とらぬ雲の未と赤き空 来

たしらは信州多々良山なるべし未だ赤き空といへを未だ暮れきらざる空にて則前句の旅人の宿とりたるさまあるべし但し打越に夕暮有れど此句は表に夕暮といはざれば論はなけれど作といふやうにもなるものなれば願はくは夕暮のやうにさこえざるやうにあらまほし又一書にたしらは輪の畑にて多々良山にあらず不二筑波杯は山の字あくても聞てゆれど多々良杯は山の字あくてもは紛ふ故さる句作はせずといへども信貴生駒杯も山の字なくとも句にもよむべし又幻住庵記中笠取に通ふ樵夫云くも笠取山之此類擧てゐるふべからずこは論するに足らざれど初學びの人の感まん事を恐れ聊辨しおくこ

一 構 歎 つ くる 窓 の 花 兆

歎は馬具之歎つくる職場の窓の花あり附意は山の端の未だ赤く日のくる頃まで仕事なし居るさまなるべし

枇杷の古葉に木の芽えはたつ 邦

枇杷の木の中古葉の中に若葉の色の萌えたつさまなるべけれど木の芽といひて春季にあしたる之附意と則窓のはとりにて花に枇杷の木の芽をあしらひたるこ

去来九 芭蕉九 凡兆九 史邦九



市中を物のよほひや夏の月 凡 兆

市中はさまざまの物とりちらし人の往き来もまげければよき句ひもあしき句ひもするなるべし其さわがしき空に月は涼しくすみわたたりたるさま市中の景氣言外にあふれたりやは冠のや之此句の如く中の句つめに有りても冠の意たがふ事なし

暑 し く と 門 々 の 聲 芭 蕉

暑しは物のにはひに通ひ門々の聲は市中のさまなり暑しはくとの下にいふといふ意をふくみたり

二 番 草 取 る も 果 た さ を 穂 に 出 て 去 来



田草取之一番草二番草三番草杯いふ事有り未だ二番草取果たさずこや穂の出でかゝりたるにて在所のせわしきさま之脇句の門の辭を在所のいろがしきさまになして發句の市中に轉したるなり

灰うちた、くうるめ一まい 兆

うるめと鯉又鱒杯書く今冬季とすれども此句には雜なるべし附意此魚は多く干物にすれば干魚杯炙る田舎のさまなるべし

此筋を銀も見しらを不自由さよ 蕉

見しらすはすしての意ある故でともすべき處之また第三の果たさずもすしての意なる故でとすべきなれども下に穂に出でて有りて耳にたてばすとなしたるからんされば此句すとしてでも第三に天爾波の通へばぬと有りたき處之疑ふらくは梓行の時ぬをすと誤りたるにはあらざるか本書の儘にかしおきて後學者の考へを待つ不自由さよのよと詠のよあり附意と干魚炙るを山家杯と見たるあり

た、とひやうしに長き脇指 来

たは徒唯杯と書くとひやうしは俗言附意は田舎渡りの放下師杯にて脇指のとひやうしに長きさまなるべし

草村よ蛙とをめる夕まゝれ 兆

蛙杯とはがる癖の有る人なるべし附意ととやうしに長き脇指さしたる大男の蛙とはがるをかしといふさまをさかしたるにて俳諧の骨稽之前句のたといふ詞によくひいたるあり

露の芽とりに行燈ゆまけす 蕉

前句の草むらに露の芽さがすさま之又行燈ゆりけすといひてことがるにひいかしたるあり

道心のおとまを花のつほむ時 来

此句の附意諸注燈のさゑたる無常を觀するさまと雖もゆりけしたる灯に道心の起るといふひいさひなからんか斯き時は此附意拙くなるべし花の蒼む時を露の芽の時候に合はしたるにて散る花に無常を觀するといふ古めかしきを一轉したる高吟なるべし但し草村より此句まで植物

三句つゝきたり

能登の七尾の冬は住みうき

兆

七尾は地名こうきは愛しきくと活く形状言七尾は寒地あれば住みうきといひて老人のさまにきかし前句を過去の事となして發心の初は花の替む頃ありしるきもいつの程やら冬になりて寒地の住みうきといひつゝ修行おし居るさま杯ならん但し春季に冬をつけたるにて季うつりなり

魚の骨をふる迄の老枝見て

蕉

しはふるは老るといふ意にて齒も脱けはてたる老衰のさまなり則前句の住みうきといふ人を老人と見立てたる之又七尾あたりは魚多き意をきかしたるなるべし

待人いれし小御門の鑑

来

いれしのしり過去之待人は戀人にて前句の老人を門守の翁杯となしたる附意なるべし

立ちぬ、を屏風を倒ふす女子共

兆

前句のいれしは過去の詞なる故其後の事を附けたるにて鑑かくすを見んと立ちかゝりて終る屏風を倒かし杯したる侍女等杯の戯るゝさまあるべし

湯殿を竹の篋子ぬひしき

蕉

句意は解に及ばず附意は前句の屏風の倒けてわびしき湯殿の見ゆるさまなるべし一書に居所打越之といひ又一書は居所三句つゝけたり杯いふと雖も前句は如く屏風杯を居處の意なれども居所を以て去嫌を論する限りにあらずたとへば魚の骨の句は老人の意おれども人倫を以て去嫌を論せし屏風の句の女子共は人倫之又待人の句は鑑が体よて小御門は用なる故居所となさるゝ

茴香の實を吹き落とす夕嵐

来

落ち落つは自ら然なる意落とすこみづから然爲す意なる事は前に解きたるが如しと雖も此句の如きは人のみづから然爲すよあらず嵐のため自然せらるゝ意を又斯いふ天附波のつらひさま之此落れ如く上二段活はか緯

下二段活はお緯に活きて斯の如く詞の表と裏になる之附意は湯殿のほとりさ面香有りて夕嵐よまばるゝさまなれど又湯殿に夕嵐うち合ふたる之若朝嵐ならばうち合はず俳諧の附意はかやうの處にも有るをしるべし

僧や、寒く寺にぬへるぬ 兆

僧のやく寒げにありくを寺にかへるかど見たるさまにて茴香の實のこぼるゝ淋しき畑道ならん又かへるかといふ詞を夕嵐に通はしたるなるべし

猿ひたの猿と世に経る秋の月 蕉

春とときめきし猿ひきの秋を淋しう我も猿も家よわひ居るさまにて月と裏の月こゝまで出です且こゝこ花の座おれど花は前に出でたる故月となしたるなるべし附意と此淋しく世を経る猿ひきをやゝ寒げなる僧に對したるこ

年に一斗の地子をぬるあり 来

地子は年貢之年に一斗は至て僅少之則猿曳の境界をいひたるなりはかるなりは未なりにてこゝといふ意こ

五六本生木つけたる 潜 兆

生木は伐りたる木なるべしつけたるはて有るの約りたる之潜とみづたまりと訓したり附意のいさゝる山林杯持ちたるさまにて年よ一斗の地子に通はしたるならん

足感ふみよとす黒ほこの道 蕉

黒はこは黒き土ありとぞ附意は生木つけたるほとりの道なるべけれと翁は實地を踏まれし作ならんか

追たて、早き御馬の刀持 来

早き御馬につきかねたる刀持なるべし附意と此刀持の足袋ふみよとすさまあり

てつちお荷ふ水とほしたり 兆

てつちは丁稚之たりはて有りの約り之附意は早き御馬にゆきあひて水こほしたるさまなり

戸障子もむしろあこひの賣屋敷

蕉

戸障子ものもは何も何ものなる故戸障子もといひて其他の物もみなあれ  
たるさまをきかしたる之附意此家の井の水杯汲みたるさまなるべけれど  
こぼしたるなりに捨ておきたるやうにもきこゆる之

てん志やうまもりいつめ色づく

来

天井守は唐からしといつかは疑の詞ある故續体段にてうち合はすべき之  
則此色づくは四段活の詞にて靡ナカき故斷止段も續体段も同し事之故に此  
づくのくは續体段と見るべし猶凡例の中活語の圖見合ひすべし附意は賣  
屋敷の庭杯の唐からしにて捨おきて有れといつる色づくさまなれど又天  
井守といふ名を戸障子に句はしたるなるべし

ころくと草鞋つくる月夜さし

兆

月夜さしは里言ならん夜仕事そるを夜あべ杯いふ類ひにて月夜仕事なす  
意ならんか一書に月夜終といふ程の詞といふも意相似たり今發句杯にた  
い月のさしたる趣を月夜さしといひたるををりに見る事有りいっいにや

附意は月夜仕事にこそくと草鞋つくりながら見るともなくあたりの唐  
からしを見たるに色つきたるさまあらん

蚤とふるひに起きし初秋

蕉

起きしのはは過去なる故前刻起きし意之蚤と夏季ある故初秋とことわり  
て秋季になしたる之附意蚤をふるひに起きて寐られざるまゝこそくと  
草鞋をつくるさまなるべし一書又蚤嫌ひの下女の夜中に起き誰も見る人  
はかしと眞裸になりて蚤ふるひけるに草鞋つくる音のしければ驚きて恥  
るさまなりといへるは過去のしを見ざる故斯の如き誤解の出来る之都て  
古人の句をきくも自ら句を作るも天訂波の過去カクゴ現世ゲンセ未來ミライの三時をよくよ  
く吟味すべき之

其まゝにころひ落ちたる舛落

来

此句上の落と動詞にて下の落は名詞之故に上は落ちと假名をおくるべし  
下は落とまかれども仮名をおくるに及ばず舛落の落の假名をおくらすと  
も舛おちとも舛おつともよむべかちざれば之此等につきておくり假名の

要不要を去るべきに附意と蚤をふるひに起さし夜中のさまなればさして  
解譯を用ゐるよ及ばず

ゆがみと邪の字杯あついがみぬがみ通する之半櫃は米入なるべけれど米  
櫃となしてこつき過ぐる故半櫃となして少し退げたるなるべし初學びの  
人これ等の句にて附意をささるべし

草菴よしをらる居まをうちやふり 蕉

貧しき風狂人あるべし此貧しきさまよて蓋のあはぬ半櫃にひいらしたる  
命嬉まきと存命居たるを悦ぶ意にて命有りたらばころ此度の撰集にあふ  
べかれといふさま之附意は前句の彼處此處の草菴を住み捨てたる人を遣  
世したる歌人杯となしたるなるべし諸注此句を西行の佛能因の佛杯いへ  
と此句に佛の似通ひたる歌人は幾人も有るべければ誰人ともさくべきと

命嬉まきと存命居たるを悦ぶ意にて命有りたらばころ此度の撰集にあふ  
命嬉まきと存命居たるを悦ぶ意にて命有りたらばころ此度の撰集にあふ

去來抄に初は和歌の奥義はしらす候と附けたり先師曰西行能因杯の境界  
に見たるはよまされと直に西行と附けんは手筒ならん只佛にて附くべし  
とてかく直し給ひぬといふ諸注は此説になづみたるなるべけれど草菴の  
句と歌人とも詩人とも僧とも定むべからず和歌の奥義はしらす候といふ  
句を手筒といはるゝ程ならば何んぞ舛落に蓋のあはぬ半櫃を手筒といは  
れざりし又一書に去來抄のと附けたりと先師曰との間に又西行と歌で附  
くべきやと伺ひけるにといふ語を補ひて辨を費やすと雖も此句者は去來  
之去來はかゝる事を伺ふ程の初心にはあらざるべし

さまくよ品ぬまりたる戀扱して 兆

戀をしてのまは爲爲爲爲爲爲爲爲爲爲爲れと活く詞の續用段爲にての添ひたるにて  
爲してといふ詞之而してては物事を爲し果てたる意ある故戀は過去ヤシカガの事  
とさくべし附意は撰集に入るべき戀歌杯有りて若ありし時さまくの戀  
なしたるを悔ゆるさまにて今は法師か尼杯なるべしかく解く時の打越の  
草菴よ意通ふやうにさくゆべけれどこれは句の裏に有る意ある故此注譯

を捨て、句の表を見る時と決して打越へもどる意はなきあり  
淨世の果ちみあ小町なり 蕉

ありは靡あり之こと關寺小町杯の觀相の意にして附意も明かなれば解釋  
よ及ゆす

何故ろ粥す、るよも涙くみ 来

何故ぞのぞと疑のぞと粥を、るにも涙ぐむは何故ぞと疑ひたるさまにて  
附意は粥す、るにもあぐみとばかりいひては二句一意になる故何故ぞと  
疑ひて少し退けたる功者のはたらきなるべし諸注或は因果の道理をさと  
すさま或は落ふれたる老女に粥振舞ふさま或は歎く人を諫るさま杯いふ  
とみか二句一意の解といふべし

御留主とあまきは廣き板敷 兆

なればはあつたによつてといふ意之此集花見の巻花咲かばといふ處に解  
きたるが如し御留主になりて廣き板敷に粥す、りつゝ涙ぐむさまなり御  
留主といへば涙ぐむ人は下僕か下女のやうに聞こゆる之其涙ぐむは何故

あるやはさく人いかやうにもさくべし諸注或は左遷の跡或は初陣の留主  
或は主人夫婦子を連れて入湯よゆきし留主杯いへといづれもおしめてに  
て附意を狭くする注解といふべし

手のひらに風這はする花のぬけ 蕉

道はするのするは令の字の意にて令るといふ詞のするとありたる之解上  
巻嘯野集月に柄の巻使の者に返事待たするといふ句の處に有り附意は留  
主守の爺杯にて風は、するは俳言之幻住菴の記に屏風に足を投げ出し空  
山に風を捫て座す杯いふに同じ

あすみうところぬ晝のねむたさ 来

花よ霞至て長閑なるさまなれば附意明かなり

凡兆十二 芭蕉十二 去来十二

○

灰汁桶の掬やみけりきりくす 凡兆

やみは止ま止み止む止めと四段に活く詞にて止みは續用段之而してけり

は續用段をうくる天爾波之又一段活二段活は未然段も續用段も同じ詞之  
一段活は未然續用どもに見見二段活も未然續用どもに起き起き杯の如し  
故にけりにてうけたる見起きの如き見けり起きけりて續用段にてすで杯  
の天爾波にてうけたる見起きで杯も未然段なり凡例の中と見合はして  
解すべしこと此句にさえて用なき事なれど此やみけりを解く序ふいふ之  
借句意は灰汁桶の取も落ちやみていとしづかなれば蟋蟀の聲耳たつさま  
なり

油ぬすりて宵寐する秋 芭蕉

油かすりては油の盡きて之宵寐するは爲る之秋は秋季をもたすがため之  
附意は發句灰汁桶の平やみそきりくす鳴くを賤家と見立て油の貯へも  
なきさまあるべし一書に獨住ひの寡にて此頂は油高ければ夜なべしても  
油代に足らずと燈し残りを油さまにかすり入れて宵から寐るさまととい  
へどかくきゝては雅も風韻もなし殊に灯をけして寐るあらば寐るとせよ  
燈し残の油を油さしにうすり入れ杯する人や有るこれらの解は論する  
も足らされど已に世に行とれ有る根本ある故若初學びの人の俳諧は斯の

如きものならんか杯思はん事を恐れ辨しかく之

新疊敷きならきたる月影よ 野水

月影にのに文字脇句にうち合はしたる之則油かすりて疊に月影のさした  
るさま之斯いへば脇句は貧しきさま之新疊敷きあらしたるいいかいとい  
ふ人あらんかなれども脇句は貧なるさまあるべけれを其貧あるさまを見  
かへて新疊となし發句に轉したる之又油かそりて宵寐するは必極貧者と  
も限るべからず山家杯のやうにもさこゆる之

あらへま嬉し十のさめつき 去来

嬉しひしき狀新しき疊敷きならへたる座敷に十人の客したるさまにてし  
さいなし

千代經べきものぶさまきく子目して 蕉

經べきの經は經經と下二段に活き續るれの添ひて經る經れと活く詞にし  
て此斷止段をべきのうけたるべきはさうな杯と俗譯すれど此句の如き  
は筈のときくべし此はつといふ詞は弓の筈の合ふ意の詞になりたるある

べしはづといふ詞は大体べきに當れどもべきとはづに當らざる處多し是  
はづは狭き詞にてべきは廣き詞なれば之物ををは重きをにてなるにち  
やのに坏いふ意にあたる事之前にも解きたり子日しては爲て之松は千代  
經るとづの物なるにさまぐ子の日して曳くといふ意之附意之盃ならべ  
て子日を祝ふさまあり又子日野を見わたしたるさまともさくべし西行上  
人の歌に千代經へきものをさなからあつひとも君か齡をしらんものかは  
驚の音にたひら雪降る

兆

たびら雪はかたびら雪の上畧にて薄雪之子日野の余寒のさまをいひたる  
にて附意しさいなし  
乗り出して肱に餘る春の駒

来

摩那の高根に雲のあまきる  
水

二月初午摩那糸といふ事有り此日近國の人飼馬の無事を祈るとて馬を曳  
きて糸り土産に昆布を調へかへる是を摩那昆布といふ此事を心にもちて  
附けたるなるべし但此句雲のかゝれるといふはよろしからざらん打越雪  
此句は雲なれば降物と緯物とかはりたれど二句去にすべきか

夕飯よあますと喰へも風薫る  
兆

喰へばは喰ひたればといふ意之喰はばは未然段喰へば已然段之附意はか  
ますとにて夕飯喰ひ終り摩那が高根眺めやりたるにて薫り来る風の涼し  
ささまなるべし

煙の口處をぬきて氣味よき  
蕉

日すがら田草取坏なし居老人にて煙の口處をかきつゝ寛ぎ在るさまなり  
則前句の夕飯くひしまひたる人なるべし

もの思ひけふは忘きて休む日に  
水

此程は物思ひつゝけたるにけふの忘れて休まるゝといふ意にて前句の寛  
きたるさまに通はしたるなるべけれと休む日にとつかひたるも前句にう



ち合ひたり

迎せまこき殿よりのふみ 来

御傍女杯ならん前句の休む日にとなしたるに文字にうち合はしたるよてけふは休む日なるにやはり迎ひせわしきふみの殿より來るといふ附意なるべし

金鍔と人によはる、身のやすき 蕉

金鍔は黄金の鍔なれば富有の武士のやうかれと此句と何か故有りて金鍔と人に字せらるゝさまあらんこは下に身のやすさといふ詞よて斯くさこゆる之に一書に自の句にあらす他の句と雖も他の句とさきこゆる附意は殿より迎ひをうけ居る人あるべけれと前句は美しき御傍女のやうにさこゆるをこゝには滑稽めきたる翁杯のやうにさかしたるなり

あつ風呂すきの宵々の月 兆

宵々の下にやゝ寒き杯いふやうの意をふくみたる之附意の金鍔と呼ばるゝ人をあつ風呂好となしさるあり

町内の秋も更けゆく明屋敷 来

町内の秋もといへば何處も同じく秋の更けゆく觀相之附意は宵々に薬風呂杯へ通ひいつも見る明屋敷の其儘よて秋もふけゆく淋しささなるべし

何と見るにも露はあまあり 水

ありと靡なりこは前句の明屋敷の淋しささまを露ばかりとといひて秋季をもたしたるなり

花と散る身を西念ぬ衣着て 蕉

花と散るといふとはにのどといひてに成ての如くに成て杯いふ意之則歌にわたつみとあれにしとこを今さらにとらはは袖やあわとうきなん上のとはわたづみの如くに成ての意之下のとは泡の如くに成ての意之此句は西行上人の佛ならん西上人は西山勝持寺西念上人の弟子と成り圓位といふ又西行とよぶとぞ此佛をとりて花の如くに成て散る身と西念上人か衣着てといへるにて西上人の得道に思ひよせたるあらん附意は何を見るに

も障ばかりといふ哀なるひいさなるべけれと秋季を春うつしたるは  
と文字の活き一書に此句のとは花とともにとのこといふは非之花と  
もに杯いふとは松と梅君と我杯つかふと

木曾の酢莖も春もくれつ、 兆

酢莖は漬菜の一種一書に木曾福島の奥御嶽山の邊にて多くするもの  
といふつゝの解は前に度々有れば畧す附意は前句の西念の衣着てといふ  
を旅僧となし木曾路の酢莖杯の淡き食に春もくれゆく淋しきさまなるべ  
し

ゆるやら山蔭つたふ四十雀 水

やはは俗言之何や何らんを畧してやらんといひ又んを省きてやらとなし  
たる之解前に有りこは山蔭つたふ四十雀を見て四十雀やかへるらんと詠  
めたるさまにて木曾あたりのかくれゆく春の趣之又四十と老の初なれば此  
鳥の名をもて前句の淋しき意に通はしたる觀相のこゝろもあらん

柴さす家のむねをゆるくる 来

柴さす家は柴家根の家あらんからぐるからくむ杯いふ詞にて家根をふき  
或は繕ひ杯するさまなるべし附意は家根ふきながら山蔭つたふ四十雀を  
見たるさまなるべし

冬空のあれに成たる北風 兆

句意解に及ばず附意も家根ふき杯し居る處へ北風の吹きたるさまなれ  
ばしさいなし

旅の馳走に有明志おく 蕉

有明しは行燈の名之名詞なる故しといふおくり假名と要らざる筈あれど  
多く有明といひならしたるものを有明しとよましたる故原本の通りしを  
ねくりたる之旅の馳走は泊り人の馳走に行燈をおくなれば常は行燈もお  
かざる不自由なる宿ある事きこゆる之されば附意と冬空の北風寒く吹き  
ある、夜にゐる淋しき家に泊り居るさまなるべし

すさまじた女の智慧もはめあくて 来

すさまじきはしき狀の形狀言ははかなくはし狀の形狀言之智慧ものもは

聊こゝろゆかざるつかひさまのやうにきこゆれど小黠しくして思量有る者なれど女の智慧なればはかきしとゆふ意を此もにてきゝしたるならんか一書に此もをのど直したれどにては此句靈なきやうにゐる之附意は前句を山中の家杯と見立て旅人をもめて路金杯を欺き奪ふ女の賊杯をこゝろにもちて作したるならんかそさましきといふ詞にてかくきこゆる之一書に今宵しのびあはんと約せし故に其客の來る道を見せんと有明かきたるに却て灯に人目せかれて行きがたければ女の智慧とはかなきものと思ふさま之といふこは前句を旅籠や杯と見たるなるべけれど旅籠やに馳走に行燈かくといふ事もあらざるべし又此句もかくきこへてはすさましきといふ詞用をささるるがごとし

何おもひ草狼のあく水

おもひ草は露草とも茅菅とも竹とも龍膽ともいふ此句は草の名をもひ思ひといふよ通よはし前句を懸にしたる之又狼の鳴くとしてそさましきといふに通よはしたるなり偕又前句のすさましき及び此句のおもひ草は秋

季にて次の夕月夜にて秋三句つゝきたるなり

夕月夜岡の萱ねの御廟守る 蕉

萱根は垣根杯いふか如く萱の生ひたる中の御廟とさくべし附意ハ思草の此萱の中に生ひたるにてあたりには狼杯もをりくくに鳴く淋しき御廟を守り居るさまなるべし

人も忘れし赤ろふの水 兆

忘れしのしつ過去之赤そふは諸注赤澁之といふ鉄氣水杯にて大師染杯いふ色の染りし水なれど今は人も忘れしといふ意ならん又古歌の忘れてもくみやしつらん杯いふ詞をとりたるならん附意は前句の御廟のあたりには有りし水ならん

うろつきよ自慢いばせて遊ぶらん 水

有る事無き事を誠しやかよ咄杯する辨を好む人に物しり顔の自慢咄杯させて慰み居る閑暇の人のさまなるべし但し此句はうそつきも遊ぶ人もこなたよりあがめたる他の句とさくべしさあくてはらんといふ天附波調の

はず附意は赤そぶの水の大師染杯いふ奇しき意のひいきなるべし

又も大事の鮮扱とま出す 来

又ものものは詠のもも最前も又もといふやうにさこゆれどろれは又といふ詞にてきこゆる之故に此もは詠にてさてもといふ意にさくべし大事の鮮と大切なる鮮といふ意にて遠來杯の珍らしき鮮なるべし附意は自慢嘲杯する人の又も大切なる鮮とり出だすさまにて前句と此句は滑稽之

堤より田の青やきよいさきよた 兆

堤上りのよりははいうるよりといひて内より外へ出る杯つかふよりにて此句には堤より青き田を見わたしたる意之附意は前句の鮮の辨當杯とさえたる之

加茂の社はよき社なり 蕉

此なりは靡なり之句意は解に及ばず附意も堤より加茂の社見たるさまなるべけれど社となしていさきよさよひいしたるなるべし

物賣の尻聲高く名乗り捨て 来

句意解に及ばず附意も加茂の社家町杯をもの賣り歩くさまなるべければしさいなし

雨のやどりの無常迅速 水

此句上ののさるく下ののいおもしやどりとともいふべき處をのとなして心をふくめたる之則浮世の常無き事は人間一生も猶しばし雨舎りするがごとしといふとのの字にもさしたるにてやどりの下も如くと添へてさくべき事は前に解し露に如き身といふを露の身といふに同じけれど露の身といふは身か体にて露は用之此句は雨舎り体にて無常迅速といふ詞は用之きまがとす時は句の姿を失ふべし附意は軒のつま杯にしばし雨舎なし居るに物賣の行過ぎたるさまあるべけれど世渡りのいそがしき観相の意も有るべし但し此句加茂社も無常打越いの無常迅速は言語なる故許したるかなれども此詞は充分釋をもちたり

晝ねふる青鷺の身のたうとさよ 蕉

雨中に睡り居る青鷺の静に無爲なるさまを詠めて静とさよといへるなる

べしよの詠のよにて前に度々いひし如く人の心つかざる處をさとし如き  
意なる故此句も鳥をたうとしと見る人もなかるべけれを無常を觀したる  
人の眼には其靜に無爲なるがたうげに見ゆる意をさかさんが爲のよなり  
此句につきてもよとやと意のたがふをしるべし但し此青鷺は雜につうひ  
たるるさあくては青田に三句去之

しよるく水に蘭のろをくらん 兆

此句のらんと聊こゝろゆるす句意は水際にろよぐ物をこなたより見てそ  
よぐもの蘭のといへるにやあらんそれならば蘭やそよぐらんとすべ  
き之又現在に隔なりと見たるならば隔のそよぐ之とか蘭のそよぐ哉とか  
なすべき之附意青鷺は水邊に多く居て魚杯をとるものなる故前句の場所  
なるべし此句の隔も夏のこゝろにて附けたるやうにさこゆる之又隔を鷺  
の尻刺ともいへば青鷺にゆかり有る之

糸櫻服いつまいに咲きにけり 来

此句のにけりいた事ぢやとさくべし附意は蘭のそよぐあたりに糸櫻の有る

さまにてしさいなるべし借花を櫻にかへたる事諸書さまくにいふ元  
來花の句と櫻をこゝろにもちてなすべきものあれば其實櫻をれどもうち  
出して櫻とはいふべからざるは古實として守るべきなり此巻杯を龜鑑と  
なして櫻を正花としたる巻をりには有れど櫻は正花よあらずと心得たる  
上にて機に臨み變に應ずる事有るべし

春を三月曙のろら 水

句意解に及ばず附意も時候を合はしたる之但糸櫻は例まは二月となした  
れど服一はいに咲きにけりといふを三月となしたるなるべし

凡兆丸 芭蕉丸 野水丸 去来丸

○

錢乙州東武行

乙州の東武へ至るとかくらるゝはなひけの句なれば其端書なり

梅若菜鞠子の宿のとろ、汁 芭蕉

端書の通錢別の句なれば梅と若菜と鞠子の宿のとゝる汁と三を擧げて其

○猿蓑集

他さまぐの東海道旅中の事物を句の外に思はしたるにて至て余意廣し  
 此句切字の事を世にさまぐにいふことは前に著とし發句獨案内といふも  
 のに粗辨したれどこゝもあらく解かん上巻にもいひし如く元來發句  
 に切字といふものを必しもいれねばならぬといふ事なし古人初學びの  
 爲に切字を定めたるは發句と平句とを區別せんが爲之故に古人の發句に  
 して切字の入らざるものまゝ有り畢竟は發句平句とも天爾波調ひたらば  
 よきもの之其發句と平句との區別は今茲又解きつくしがたしよしくだく  
 しき事をいひならぶるとも句の數を見て自らしるにあらざれば詮なかる  
 べし偕此句の梅もよからん若菜もよからん鞠子の宿のといふ汁もよら  
 ん杯いふ詞を省きたる之則君と水臣の船といふが如き君は水なり臣の船  
 なりといふべきなりを省きたる之猶此詞を若君水臣船となす時之ともな  
 りも共省きたる之此省く例の文章にも和歌もまゝ有り殊に發句は字  
 數少なれば省きたる例最も多し但し初學びの人みだりに此例にならひ  
 名詞のみをつらぬる時は何ともさし得べらざる句も出でくべければ用  
 心すべきこと

笠 あたらしき春の曙 乙州

句意解に及ばず附意も發句餞別にて此句旅立のさまなれば解を用ゐず

雲雀鳴く小田に土えつ頃あれや 珍 碩

なれやは上巻にも粗解きたれど初學びの人の惑ひやすき天爾波なる故猶  
 こゝに例を分けて解かんそべてたれやけれやぬれやなれや杯れをうけた  
 るやを伏やといふ第一疑ふ伏や第二かへそ伏や第三詠むる伏や第四願ふ  
 伏やの四例有り第一疑ふ伏やは俗言のやらといふにあたる則歌に「我が戀  
 とみやまかくれの草なれやしけさまされとしる人のなき」此なれやちや  
 やらといふ俗言にあたるなれは靡なりヒナのりがれに活きたるなれを俗言は  
 ちりもなるもなれもひとしくちやと譯する之此なれにやの添ひたるにて  
 やを疑ときく時ちややらとなる之第二のへす伏やはんやはといふ意に  
 てなれやのならんやはときくべし則歌に「まはさるゝあまの衣よことあれ  
 やうきたる波にぬるゝ我か袖」此なれやはならんやはにてうらへかへる天  
 爾波之第三詠むる伏やは事かなといふ意にて則歌に「草まくらこよひはか

りの秋風よことわりされや露のこはるし此きれやはことばりなる事か  
ときいて露のさほるるの下にはを添へて見るべし此例は上卷春の日  
から阪やの巻一夜かる宿は馬か寺なれやといふ處及び初懐紙けし  
咲てあはれに見ゆる宿かれやといふ句の處に解きたるに同じ第四願  
ふ伏やとてくれといふ俗言よあたる則歌に有明の月たにあれや郭  
公今一聲のゆくかたも見ん此あれやと月だに有つてくれよかしに  
て願の意之おほよそ斯の如し此天爾波にて笠新しき春の曙といふ  
に附けたる之脇句曙の下には文字を添へて見るべし

しとき祝ひて下されにけり

素男

しときは桑又養と書く餅或と蒸物杯のたぐひときくべし祝ひて多く祝ふ  
て祝うて杯のくと雖もて元來續用段をうくるものにて斷止段をうけず  
うてとなすこふの音便にて正しきにあらず此斷止段をてにてうくるは二  
段活の續用段を靡かし起さる受ける杯いふ俗習と同じ事之凡例の中見合  
はしてしるべし此類集中にまゝ有り處々にはいはすおしてしるべしにけ

り此句にこれ事ぢやときくべし附意のはなやかかる春なれば祝ひ事杯有  
るさまなるべけれと下されにけりといへば小田に土もち杯する小百姓の  
大家より祝物もらひたるやうにきこゆる之此句又前句のなれやにうち合  
ひたり

片隅よ虫齒め、へて暮の月 州

暮の月の下よ見るといふ詞を添へてきくべし附意は折角に桑祝ひて下さ  
はたれと折あしく齒の痛むとなしたるにてたがひ附杯いふつけさまなる  
べし此句表に病体いうつ一書に病体なれと最も輕しといへと病の輕重に  
よみて表に許す許さざるの區別をささん事のかたかるべし

二階の客をた、きたる秋 蕉

此句前句のうしろにもたしたる附けさま之則片隅に虫齒かへて月見居  
るうちに二階の客のた、れたるやうにきこゆる之一書に此句のたるはけ  
ると改めたる方前後よしといへりこは此句を正面にあさんとするなるべ  
けれと工みにつけたる句を拙くなさんとするが如し

放ちやる鶉の跡は見にもせず

男

一書よ放生會といへど放生會ならば鶉としもいふべからざらん鶉は草にうくるゝ鳥なれば跡は見にもせずとなしたるの附意と客のたゞれたる淋しき二階より見たるさまあるべし

稻の葉のひの力あきあせ

碩

前句の見ぬもせずといふ淋しき余意にて鶉は見ぬす唯力なくのびたる稻葉のそよくとそよくばかりにて稻葉のそよととふ人もなし杯いふに思ひよせたるならん

發心の初にとゆる鈴鹿山

蕉

こは諸注の如く西行上人杯の佛にもやあらん山家集に鈴鹿山浮世をよそにふりすていかになりゆく我が身なるらん猶佛の似通ひたる事は此外にいくつも有るべし附意は鈴鹿山より力なき稻葉のそよきを見たるさまなるべけれど發心の初といふ覺束なき意の力あき稻葉に通ひたるなり

内藏頭おと呼ぶ聲はたき

州

内藏の頭は官名るとは物事を試る意之やをうけたるととみか此例之かとの下にいふてといふ詞を添へてさくべし附意と前句の鈴鹿山越る人の發心して墨染に姿をうへたれと元之内藏頭なりし人よやと思ふさまよなし内藏頭かといひて呼びかけたるなれと呼聲は誰といふにて前句の人の自の句にさこゆるこ

卯の刻の箕手に並ふ小西方

碩

箕と星之箕手と軍陣にて箕手と陣張りたる之小西方は小西行長にて行長の臣に小堀内藏頭有り以上の諸注の要をとりたる之附意は卯の刻といへば曉がたのはのくらさよ内藏頭かと呼びかけたるは誰なるやと思ふさまなるべし

をみきる松のこつあまき

男

なりけりはで有る事ぢやの意之此句景氣をいひたるのみあればさして解を用ゐるに及ばず附意も朝陣はりたる靜なるさまのみ

殺の札簿の札によみあして

州



此句は諸注の如く撰集抄の佛ならん草々に札つけて歌書きたる事有り萩の歌に萩の花うつらふ庭の秋風に下葉もまたて露はちりつゝ薄の歌に薄茂る秋の野風のいかならん夜なく虫の聲の寒けき附意は松は高くすみきり萩や薄の風にみだれもつれくたれば萩の札を薄の札によみなしたるよて圓杯の趣ならん

雀おたよる百舌鳥の一聲 智月

一聲の下にるを添へかたよるへかへしてさくべし附意萩薄の生ひみだれたるあたりに群れ居る雀の百舌鳥の一聲にかたよりたるさまよてしさいなし

懐に手とあと、むる秋の月 凡兆

秋もやゝ寒うかりたる朝の月杯にて前句の百舌鳥の聲に雀のたよるを寒げにさかしたる附意なり

汐定まらぬ外の海つら 州

外の海面と大洋なるべし内海とは異なりてしほの満干の見定めがたしと

いふ意ならん附意は手を懐にして海見たるさまにて又月に汐となまたる

鎗の柄に立ちまゐりたる花の暮 去来

こと手負の武者杯にて磯邊に鎗にすがりて立ちたるさまにすがりたるといふよて手負のやうにさこゆる之花の暮と花の散り杯する夕暮よて其あたり花有るさまなれと爰は花の座なる故斯く作したる

灰またちらすおらし菜のあと 兆

からし菜は菜の一種にて春季之附意は前句を鎗持杯と見るへ供待の間百姓の爲し居る事を見居るさま杯にしたるなり

春の日に仕舞ひておへる經机 正秀

何れかに讀經なし仕舞ひてかへるなれば春の日にといふにて久しく經机に向ひ居りしやうよきこゆる之附意は此僧の畑道杯通りてもとるさまにて往く頃は此畑に雪有りたれと今は菜もひきしまひたり杯思ふ意を幽に二句の間にさうしたるなるべし

店屋物くふ供の手ぬはる 来

店屋物は菓子くだ物杯さまぐの物をいふ俗言之供は前句の僧の供にていつも連るゝ供のかゝる事をけれど今日の供は店屋物杯喰ひたがるといふ意之手かゝりといふにて斯くきこゆるこ

汗ぬくひ端のしるこの紺の糸 半 残

汗拭の布片に糸にてしるしゝたるさまにて前句の僕杯の持ち居るさまなるべし

あぬれせぬしぎ雞の下 土 芳

せわしきはしき狀の詞之雞の下は雞の聲の下といふ意にて雞の鳴くや否せわしげに別るゝさまにて附意はせわしまぎれにしるしゝたる汗拭をたづねわづらふさまなるべし

大膽に思ひくつきぬ戀として 残

思ひくづれぬは艱難を凌ぎて思ひを遂ぐる意あるべし附意は前句をきぬくとなしたる之大膽にといへば伊勢物語の在五中將のしのびて齋宮に

あひ奉りたる佛のやうにもきこゆ

身はぬれ紙のとり所なき 芳

濡紙のの下に如くになりてといふ詞を添へてきくべし大膽にも艱難を凌ぎて戀を爲す身は濡紙の如くになりてとり所なきといふ意になしたる附けさまこ

小刀の蛤刃ある細工もと 残

蛤刃の小刀細工にて拙く出来たる箱なれば此用わやうもなきやうの箱にて濡紙の如くとり處なきといふに對したるならん又濡紙に蛤刃の小刀ともきくべし又職人尽歌合に「いつまでかはまくりこなる小刀のあふべき事のかなはさるらん」

棚と火ともす大年の夜 園 風

句意は解に及ばず附意は前句の箱に神杯まつりて棚に火ともすとなしたるならんうさればわび住居のさまに見ゆるこ

爰もとは思ふたよりも須磨の浦 榛 雖

こは左迂の人杯にて都戀しく思ふさまならん心にすまぬといふを須廣の浦といひかけたるならん附意は前句をわび住居と見立てたる之此句諸註に源氏須廣の巻の佛なりといふ

むねうちあをせ着とる肩衣 殘

前句は思ふたよりもまいならぬものうき人かれを言葉をつしく作されたればこゝにも言葉をかしく作して其人のとりみだしたる姿を見せたる附方なるべし

あの夏もあなめとく、る破扇 風

此夏ものもは何も何ものもなる故去年の夏もといふ意にさこゆる之かかめをくゝるは要のとれたる扇を糸紙捻杯にて括るなれば儉約の人とも貧しき人ともさゝるゝ之附意は肩衣の胸くつるげたるを暑き頃と見立扇となし其人のもち居るさまにさうしたるこ

醬油ねさせて志をし月見る 雖

醬造るを夏季とすれば此月は夏之附意は前句を儉約を守る田舎の人杯と

見立て自用の醬油つくるさまなるべし

咳聲の隣をちめき縁つたひ 芳

咳聲シヤウキの下にする杯いふ詞を添へてさくべし附意は此縁にてしをし月見るさまにさかしたるこ

添へをそふほとこくめんあ顔 風

添へば添ふはほの下に猶なほといふ詞を添へてさくべし見れば見るほを聞けばさくほを杯いふ詞みな此意之但しこれは俗言之こくめんは小工面ならんこくめんなのなはさるのるを省きたるにて俗言之附意は咳聲のさこゆる隣に顔をよせて相談杯かし居るさまなるべし

形なき繪を習ひたる會津盆 嵐 蘭

形カタナなきはさらくとかきちらしたる繪あらん習ひたるはうゝる繪をこどさらに模寫したるをいふにやあらん會津盆は奥州會津にて製する塗盆なるべし附意未だこれぞと思ふ註解も見ず愚考もこたさいれと前句の談合杯なすあたりには有る盆あらん

薄雪ぬる竹の割下駄 史邦

竹を割りたる庭下駄にて物敷寄よつくりたる庭先の飛石のやうに見ゆる  
之附意は會津盆を給仕の盆杯となしたるなるべし

花にまたことしの連を定まらず 野水

原書花に又とあれどまだならん前句余寒のさまなれば今年は未だ花の旅  
の連も定まらずといへるあるべし但し前句の薄雪の一句はなと時と冬な  
れど此句をつけて余寒のさまにきこゆるこ

雛の袂を染むるをうせ 羽紅

雛の衣の錦織の色うるはしきを斯く作したるならん冬の日霜月の巻に茶  
に糸遊を染むる風の香といふ又作意相似たる附意は前句の花は未來の意  
にて附けたるされど花の頃と見うへ雛となしたるこ

- 芭蕉三 乙州五 珍碩三 素男三 智月一 凡兆二
- 去来二 正秀一 半殘四 土芳三 園風三 枚雖二
- 嵐蘭一 史邦一 野水一 羽紅一

菽菴集 卷之六

幻住菴記

芭蕉 艸

石山の奥岩間のうしろる山有り國分山といふ 江州石山の奥  
岩間山正法寺

の後に國分山有り瀬田より石山を弓手に見  
て一里はかりの處にて此あたり國分村といふろのぬみ國分寺の名残つ

たふあるへし 往昔天下に勅して國ごとに國分寺を建てられたりなるべ  
しあるは靡ありの現在に活きたるべしはさうなと俗譯す

麓に細き流をわとりて翠微に登る事三回二百歩にして

翠微は山未だ頂上ならず翠微と名づくといふ翠のいまだ深  
からずといふ意にや一步は六尺之よししては有と俗譯す 八幡宮たせ

たまふ神體を彌陀の尊像とぬ 八幡宮の國分村の鎮守よて近津尾  
八幡宮といふとぞ八幡大菩薩本地

阿彌陀如來といふか 唯一の家には甚忌むある事 唯一の家は唯  
一神道といひ

やは疑詞を重ねたるこ て佛を交へざる之今と神佛混合を廢せられたれば別段此家をたつる事な  
し思あるの靡なりの現在に活きたるあり下解を略す事をのこなるにち

やのに杯  
いふ意之 兩部光枝和げ利益の塵と伺うしたまふも又貴し  
兩部は神佛之光を和らげは和光同塵之たまふもの  
もは兩部もといひて唯一も尋じとさす天爾波之 日頃人は人の詰り

けれも  
ざりはす有りの約りたる之けれとけりの已然段に活きたる  
ありはとて出杯の天爾波は此段を受く凡例の中見合はすべし いと

、神さひものしつあふる傍に住み捨て志草の戸有るよ  
えき根笹軒たぬとみ屋ねえ壁落つて狐狸ふしとと得

たり幻住菴といふ  
幻住庵の跡今は草中に塚石有るのみ其處より廿丁程出てたる  
處に幻住菴有れども禪宗の尼寺にて俳士の居るよわらず高良

山僧正の筆を染られたりといふ幻  
住菴の額は今猶此處に存せりとぞ あるこの僧何あしを勇士菅沼氏曲

水子の伯父になん侍りしと  
菅沼氏曲水子は膳所の藩士ありしとぞ  
伯父になん此なんを世にぞのなんと

いふとに通するやうにさこゆればなれとぞとは意別之なんよ詠のまん中のなん  
去なんの三例有り詠のまん今一度のみゆき待たなん杯つかふ例之去な

んは「末つじ花の色にいてなん杯つかふ例にてぬべしといふが如し中のな  
んは則此章のなんにして詞の中に有りてうちあてせ詞有る例之伯父にな  
ん侍りしとうち合はしたる之詠には必とどうくる之「たもとよりはなれて  
玉をつゝまめやこれなんろれとうつせみんかし又文章に詞の末に有りて  
つかひ捨てたるが如きはうち合はしを省きたる心之此なん一章一篇の中  
に殊にたしかにさるさんとする處につかふ天爾波にて俗言にながさのが  
な杯いふにあたる則どうしてなかうしてなろれがなこれが見るのがな  
聞くのがな杯いふにこゝる同じ文章にさしもなき處に斯かん侍る杯つか  
ひたるもの多き故ぞのやうにさゝ、誤るな  
り侍りしをのをいなるにといふ意なり 今を八年はありむあしにあり

て正に幻住老人の名枝のみ残せり  
幻住老人の内候の長臣本田八郎  
左衛門と稱し天和三年六十有余  
にて没したりとぞ探  
山居士といひしよし 予又市中とさる事十年はありまして五十年

や、ちあき身は  
此時元祿三年なり  
養虫のみの枝失ひ蝸牛家と  
離れて  
歌に「みの虫のみのやうせけん雨の夜を父よ母よと鳴さあかしぬ  
る」又家を捨てぬ心はあなしかたつむりたちまふへくもあらぬ世

なれ 奥羽象瀉の暑き日に面杖とめし高すふとあゆまくる  
こき北海の荒磯よきひすと破るま

此くたりは翁奥の細道の旅行より  
此幻住龍に入られしまでのあらま  
しにて元祿二年の春東武を立ち北國行脚に赴かれ其年の秋美濃に至らる  
此間奥の細道の記行有りろれより尾張伊勢を経て大津に年を越ぬ翌三年の  
夏幻住龍に入られ四年の秋までこゝに幽栖せられしといふこれより下は幻  
住龍の趣國分山の景氣  
を書きつゝけられたり 今歳湖水の波よ漂ふ鳩の浮巢の流れと、

まるへた蘆の一本の陰たえのしく軒端茂たあらため垣  
ね結添へなとこし  
歌にからさきや鳩の浮巢のいかにしてさそらひわた  
る世をたのむらん茨と芽を以て屋を覆ふと見ゆ茨き  
めなり 卯月の初いとありろめよ入まこ山のやうて出まこ

とさへおえひろみぬ  
入りしのと過去之願は其まゝにとりもなほさす  
杯いふ意之今俗言のやがて聊意たがふ事有り出で  
にはすの活きたる之俗言のまゝに此さへは俗言のほかにあたるるみぬは

去ぬのぬ之西上人の歌に吉野山願いてし  
と思ふ身を花散りあこと人やまつらん  
さすぬに春の名残を遠う

らす  
からすはくあら  
すの約りなり つし咲残り山藤松に懸りて時鳥こまく  
過る程宿ぬし鳥の便さへ有る枝木つゝきのほくとも

いとほしきと、ろ、ろに興して  
過る程はうちといふ意にあたる春のは  
を身のほと杯いふが如しろし鳥は櫻鳥  
又燕ともいふ宿かし鳥といひひらけたる之便さへのは俗言のまゝでとい  
ふにあたる有るをのをは俗言ののにといふにあたる木つゝきは啄木鳥寺  
つゝさともいふいとほしはすの活きたるにて  
俗言のまゝといふ意ろろと慢の字の意なり 魂呉楚東南にまこり身

を瀟湘洞庭に立つ  
魂とは文字を添へてさくべし杜子美丘陽樓の詩  
に昔聞洞庭水今上丘陽樓吳楚東南折乾坤日夜浮又山

谷の詩に惠宗烟雨歸雁坐我瀟湘洞庭底欲喚扁舟去故人道是丹  
青これらの語をとりて國分山の景氣を賞せられたるあるべし 山を未申  
にろまこち人家よきほとよ隔り南薰峯よりおろし北

風湖杖浸して涼し

湖なるべけ

れを改たじ

人家より程此は俗言のまいつかはれたるにて古言のばかり之南蕪は蕪風にて夏の風之原書海を浸しとあれど  
日枝の山比良の高根より辛崎の松は霞みあめて  
城あり橋あり鉤たる、舟あり笠とりよ通ふ木樵の聲麓  
の小田に早苗とる歌螢飛ひあふ夕闇の空よ水鶏の扣く  
音美景えのどとしてたらずといふ事をよし

東より國分山より眺望の景色なり

中に三上山は士峯の傍よあよひて武藏野

の古き極もおえひ出てられ

三上山は富士の傍よ似通ひたれば深川の庵を思ひ出たされたる懐舊の詞あり出でられは被

の字の意らるれと活かし下の田

上山といふ詞につけたるなり

田上山よ古人とあうあう、ほめ嶽

千丈の峯袴腰といふ山あり黒津の里いと黒う

黒は黒しきくと活らぐ詞にて黒うはくの音便にて轉したる俗言之但俳文よは用ゐてしるいなし田上山の

邊に古人の幽栖の跡又古墳有れば古人をかぞふといへるならん笹生り嶽は

栗田郡千丈の嶽は其つゝき袴腰は

又其南之黒津の里は田上山の麓也

けんの解

萬葉集の姿ありけり

此歌萬葉に見えずは空にてひかれし故思ひたがこれたるにやあらん

猶眺

望くまゝあらんと後の峯に這ひのかり松の棚作

此下葉の圓座の間に疑

らくは欠字あらん松の棚

作詩に旋斫松枝架作棚

葉の圓座と敷きて猿の腰掛と名付く彼

の海崇よ巢といとまひ主薄峰よ菴と結へる王翁徐佳也

徒にあらす

一書に徐佳家に海棠數株有り巢を其上に結ひ時々客と其間よ飲す王道人は屋を主薄峯の上に結ふ

唯睡癖山

民と成て鼻顔に足とあけ出たし空山に風を捫て座す

睡癖山民と捫

を好む唯の山人といふ意厚顔は臙瘦たる顔といふ意ならんかされば此くた  
りは古の王翁徐佳杯いふ道人の徒にとあらず唯の厓を好む山民とありて  
やせたる顔にやせたる足を投げ出し空山に風を捫つて座すといへるにて

隠者の身を謙遜せら  
れたる詞なるべし たましく心まめある時を谷の清水を汲みて

自炊くどくくの粟どもひいて一爐の備へしとせらるし 幻住

一爐自炊のわび

菴中

おもひやるべし また昔住みけん人の殊に心高く住みふし侍り

てとくみおける物すたもなし持佛一間と隔て夜の物と

さむべき處あといふ、あしつらへり

はた昔此はたは元來はま  
たといふ詞のまの省かり

たるにて天爾波につらふ時はふかきこゝろ有れども爰に解く時はかへつ  
て煩はしければ俗言のまたときくべし住みけんのは前も解きたる  
如く有り過ぎたる事を思ひやる天爾波にてけるのくつるぎてんよな  
りたるなれば此文の如きも有り過ぎし幻住老人の心を思ひやる詞之殊に  
心高く住みなし侍りてたくみおけるもたすきもなしといふ語意をどめて  
見るべし今人の閑居をなして珍しき器物杯をおき列ねたるを幽栖隠栖に  
あらず物をもてあろびて志を さるをのをは前に解きしをに同し  
失ふといふ古語まことある哉 さるよ さるをのをは前に解きしをに同し  
くなるに杯いふ意をれと爰には然

あるにと 筑紫高良山の僧正を加茂の甲斐何めしと嚴子に

て 高良山僧正は筑後國御井郡高良山不瀧山蓮臺院主一如僧正なりとぞ加  
茂の甲斐何めしは加茂の嗣官藤木甲斐守敦直と号し慶安寛永年間の能  
書なりしとぞ嚴子は未だ詳にせざれと門葉杯いふ意かにての俗言の

て 此たひ落にのほりいまをありけるよ 此たひはこたびとよひ  
べし元來此の字をこの

とよむはの文字を添ふる管にいませありけるは往まし有りけるのきの省  
かりしのそに通ひあのかに横に通ひたるなりけるをのをはなるにといふ  
意なれども爰に はにときくべし よる人として額とをいふとやすくと筆と

染めし幻住菴の三字と送らる らるは被の字の意にて  
爰には敬きていふ詞と 額て草菴

の記念とあしぬ この額は則其まゝに又とりも寄はさす杯  
いふ意之幻住菴の三字の額は前に出せり すして

山居といひ旅寐といひする器たぐはふくもあし さる器  
のさる  
は然有るの約りたるにてこれぞといふ器杯とさくへし野ふへくのへくと



筥こき木曾の槍笠越の菅蓑をありこのばかりは俗言のだけ枕の上の柱

におけり上はほとり晝は稀々とふらふ人々に心を動かし

あるを宮守の翁里のものと共入り来りてゐのし

の稽くひあらし兎の豆畑よめよふあと我ら聞しらぬ

農談談の下疑らくはに日既に山の端よめ、れば夜座静に月

を待ても影と伴ひ燈と取ても罔両に是非とこらす罔両は影法師

今子起猶影法師に問答する談杯まゝ有り あゝいゝはとてひたふ

るに閑寂を好み山野に跡とめくさんといふをあらすや、

病身人よ倦きて世といひし人よ似たり此くだりと前に王翁徐佳云々といは

れし所と意相似たり隠者の身を謙遜せられたる語氣其徳うかいふべき

な 倩年月のうつろこと拙き身の科枝おもふに倩はつらくにて徒にとき

くべしこしは ある時仕官懸命の地枝うらやみ一たひを佛

籬祖室の扉に入らんとせしも せしものもはたどりなき

さハ風雅の道の細くハ さハは前に解きたる如く剛たるも風雲に身枝せめ花鳥よ情を勞して暫く

生涯のをあり事とさへあま の、主たるものよ及ぶ意にて爰に

は生涯のあすべきわさどさへなればとき 終に無能無才にして

くべしなればは成たに依てときくべし つながらるのるは被の字の意にて俗言の

この一筋につあめる つながらるのるは被の字の意にて俗言のの語深く意をとめて見るべし仕官懸命云々は俗に依て俗情をのべられたるなるべし佛籬祖室云々の語と佛の道の高く尊きはうかいへどもたどりなき風雲にさへられて入り得ずと歎息せられたるなれども此高尚なる道

に入るも名欲利欲を捨る事能はざれば煩惱を養ふ事は仕官懸命の地をう  
 らやむ俗情にかはる事なかるべし猶凡例にひきたる佛頂禪師と茶話の詞  
 見合はとべし茲に至つて無能無才にして風雅の一筋につかかれ玉ひし肺  
 肝うかいふなきなり 樂天は五臟の神技やふり老杜は瘦せたり賢愚  
 文質のひと志めらざるもいつれお幻の栖すまあらずやとお  
 もひ捨て、ふしお いつれう幻の栖ならずや此すやはざらんやある  
べし若すやならば上をいつれもとのをもにすべ  
 きこは誤寫からんか樂天老杜五臟の神をやふり瘦たりは詩作に苦しむ  
 をいふ賢愚は古人を賢とし我を愚とす文は文有る人質は不文の人之又古  
 人と我とをいふ

先たのむ椎の木をあり夏木立

椎の木ものもは何も何ものもなる故猶他にもたのむべきもの有る意なり  
 則友なきを友とし貧しきを富めりとして此草菴に閑居せられしあるべし  
 諸注此句を源氏権の本の巻の佛之といふ

題芭蕉翁國分山幻住菴記後

何世無カ隱士以心隱為賢也何處無山川風景因  
 人美也コト間讀芭蕉翁幻住菴記乃識其賢且知山  
 川得其人而益美矣可謂人與山川共相得焉廼  
 作鄙章一篇歌之曰

琴湖南兮國分嶺	古松鬱子綠陰清
茅屋竹椽繞數間	內有佳人獨養生
滿口錦繡輝山川	風景依稀入俳城
此地自古富勝覽	今日依君尚益榮

元祿庚午仲秋日

震軒具草

一書に震軒之向井元端字は履信號仁焉其子又向震軒といふ去來の兄なりといふ

以下發句及丈艸の跋を畧す

炭俵集終

俳諧炭俵集 上卷

炭俵集は元祿六年より七年の間成りたるものにて此年祖翁の我が浪花の枯野に夢の跡を遺しかへらぬ旅に立たれたれを蕉門俳諧の風調は此集に止せまるものとなし細く輕き風調を蕉門俳諧の龜鑑となす俳士多しそをわしといふよのあらざれと貞享元年の冬の日より此集に至るまで十一年の間の風調の變化七部の集を見てしるべし祖翁を猶十年も世に在さしめを又いかなる風調を見るときもしるべからず元祿七年より今年に至るまで二百年の久しきを經て猶炭俵集の風調をのみ龜鑑とあすは琴柱コナヂに膠ニカシのたぐひなるべし冬の日春の日と高尚なりと雖もあしくまねふ時はぬめりを免れざるべし炭俵續猿蓑は輕妙なりと雖もあしくまねふ時は俗に落つべし千載不易一時流行のことわりを知り七部集中に於て貞享元祿年間の風調をうかひひ今の俳諧をなすべし前にもいひし如く近世もつはら炭俵を以て蕉門の風調とする人多ければ此集を注するに先だち聊辨しかくもの

梅の香にのつと日の出る山路哉

芭蕉

梅が香梅の香此がどをとをくわしくいへば區別有る事にてがといふ時と重くのといふ時は軽したとへばささるたの雨や西施が合歡の花此句の如き西施のといふ時はいふべからずのどがとの輕重しるべき又日の出るを日が出るといふは俗言に古今集に梅の香のふりかける雪まがひせばといふによる時の梅の香梅が香の區別有る事なれど此梅が香の如きは歌にも古くいひならしたる事なる故俳にはさして區別をなすに及ばざらん又松の枝を松が枝月の瀬を月が瀬杯は唯いひならしたる詞之其句其文章によりては俳と雖ものどがの區別すべき之山路哉の哉は名の哉之則日の出る哉の間山路といふ名詞のはさまりたる之句意はさこねたる通りさして解に及むす

處々雉子の啼きとつ野坡

啼れつと四段活れ詞の斷止段にてとめたるにて此脇は動詞とめなり附意と梅咲き句山路の朝日に雉子の啼きたつさまおればしさいなし近世の俳士と發句人情なれば脇句必人情にてすべし發句景色なれば脇句又景色よ

し杯いへる事まゝ有れど此卷發句人情にて脇句景色をれどもよくうち合ひたる之或人處々に雉子の啼きたつといへば必これを聞く人有りとゆふ斯の如く聲有れば聞く人有り色有れば見る人有りといふ時は人情をき句は一句もなうるべしいかなる句と誰も人の作したるものなる故深く鑿穿する時は人情なるべからず俳諧の附法は人情の有無にありはらず意前句にうち合ひて打越の句に轉したらばよしとすべしこいふにたらぬ事なれど初學ひの人の爲に辨しかく

家普請と春の手すきととりつきと

とりつきとはつらひ捨てたるてなる故前後の句にうち合ひたるなり則春の手すきにありたれば家普請にとりかゝりたる頃は雪も解けきり處々に雉子も啼きたつ山家杯のさまにて此意をてにて通はしたる之但し此句に之山家とも市中ともさく處なま前句につきての解釋のために設けたる架空の詞なればあしくさく時の發句の山路へもとるべし

上のたよりにあゆる米の直 芭蕉

上がたの便に米の價のあがるといへば前句は下筋の田舎のやうにさこゆ

る之此句又とりつきてといふよりうち合ひたり則家普請にとりつきて有るに上の便に米の直の騰るさま一書に買入れたる米の上りて仕合せよき体之と解したれど其仕合なるの不仕合あるかは解くべからず

宵のうちばらくとせし月の雲 全

宵のうちと俗言之古言にはほとといふ處之せしと過去キンカダのし之故宵のほとははらくとせし雲のや、晴れたるさまならん附意の月見頃の空の晴曇にて米の直の上り下りにひいかしたるなるべし

藪越はなす秋のさひしき 野 坡

藪越トビにトビに文字を添へてさくべし咄ハナシと咄する杯いふ時は名詞の如くなりて咄し咄す杯いふ時は動詞之さひしきとしき狀之附意は月影に藪こし咄するさまなればしさいなし

御頭へ菊をらばる、めいあくさ 全

御頭は足輕頭杯ならん御頭へは方の字の意之もらるゝと被の字の意にてこなたよりやらんと思ふにあらざるにいさほひにつきて然せらるゝを

さかす天雨波之迷惑さは暑さ寒さ杯つゝるふ詞にてげといふに同じやうなれどさどげとのわかれを茲にあらく解かんさは表にも裏にもいふ詞にてげの表にのみいふ詞之則此句の迷惑さの如きは自の事をいひたるよて裏之又晝睡る青鷺の身のたうとさよ此句のさの如きは他の事をいひたるにて表なりげは表にのみいひて裏にいふ事なし則初時雨猿も小猿をほしげ之杯の如しこれらの句につきてさどげとの區別するべし附意は前句の藪越はなすを足輕の長家杯となしたるにて其はあすさまをいひたる之

娘をあたう人に逢はせぬ 芭蕉

逢はせぬのせは令の字の意にてさともしともすともせともつかふ之せぬと已然段をぬよてうけたる之又さぬとする時之未然段をぬにてうけたる之逢はさぬと逢はせぬと意同しやうかれどたがふ之逢はさぬの我より禁する詞之逢とせぬは人に禁せられたる詞之未然段と已然段にて意の反對なる事しるべし故に此句は前句の菊もらばるゝを迷惑がる人にはあらず其人の娘をかたう人に逢はさぬを他の人の逢はせぬといふ意なる故菊もらひに來たる若者杯の自の句とさくべし故に此句を以て前句をも戀に

なしたる之古人の天爾波を自由につかはれたる處深く味ふべし

奈良通ひおあしつらある細基手 野 坡

つらなるつらは連又列杯なるべし一書に類ツとしたるの笑ふべしなるはよ  
有るの約りの基手は資本カ之附意は小商人の同僚の人の娘の噂するさまに  
さかしたるなるべし

ことしを雨のふらぬ六月 芭 蕉

句意解に及ばず附意も旅商人の雨なきをよるこぶさま杯ならん

預けたるみろとまにやる向河岸 野 坡

たるはて有るの約りの前句ことしはといへを去年はいたく雨ふりたるや  
うにきこゆれを雨の用意に預けたる味増杯をことし雨のふらざれば取  
りもどす意あらん

ひととといひ出すお袋の事 芭 蕉

ひたとははたと杯いふ詞にて俄にこゝろつきたるやうの意ならんかお袋

は人の妻をいふ江戸の里言なれど此句には後室杯をいふ里言のやうにき  
こゆひたとお袋の事をいひ出したるにつき預けたる味増を思ひ出してと  
りにやるさまならん諸注此お袋を死に去りし人とすれど死に去りし人と  
も不在ノの人とも元より他の家の人ともき定むべからず此句お袋お頭よ  
四句去之御と御と面を嫌ひととねととは七句去之こは誤られしとも  
寫し誤りともしりがたけれど今の俳諧の龜鑑とはさすべからず一書に見  
落としとして許し玉へりと有れどいかに祖翁たりとも自ミツカの句を自許し玉  
へりといふ事は有るべからず又一書に「お頭の句近く候お袋の作如何翁曰  
お袋より外によきものあらばともかくもと云ふされば河海の細流を撰は  
すといひんか差合くりといはれんより上手といはれよといふも俳諧の金  
言ノといふ此書の如くあらば新式も御傘も無用之祖翁と勝手氣儘に俳諧  
せられたるが如し斯の如き虚言を設け此集の誤を飾らんとするは祖翁を  
尊敬する意の過ちて祖翁に諂ひ俳諧の式目をみだり祖翁を俳諧の罪人と  
なすものなり是等の書に猶これに似たる事まゝ有れば見ん人用心すべ  
きと

終宵尼の持病を押へける

野坡

終宵のよもすがら之持病は癩杯をらん押へけるといふにて斯くさこゆる  
之けるはけりの現在に活きたる之附意此尼の持病を押ふるはいかなる人  
ともしるべうらされを終夜介抱しつゝ別れ居るお袋の事をふと思ひ出し  
ひたといひ出すさまなるべし

とんにやくをりのとる名月

芭蕉

とんにやくは蒨翹之此句のばかりは俗のだけといふ意之附意の月見の酒  
宴も夜明に近く蒨翹ばりになりたるに終宵尼の持病ねさへ居たる人も  
來たるさまなるべし

初雁に乗懸下地敷てみる

野坡

敷てみるは試るといふ意之初の聲に旅立の支度するさまにて附意は前  
句を夜明と見立てたるなるべし

露枝相手も居間ひとぬき

芭蕉

露を相手は廣き野杯の見る人もなき處にて居合抜なしみたるにて前句旅

立のさまなれば供の若者杯の戯るさまにやあらん露の秋季を連れたる之

町衆のつらりと酔て花の陰

野坡

つらりとはいのどといひて準ふると之花と散る雪とふる杯つかふとこの  
町衆のは侍杯のいへる詞のやうにさこゆれば町人衆のつらりと酒も酔ひ  
て花見居るを前句の意合ぬきあす人の見たるさまならん

門を押しさるゝ壬生の念佛

芭蕉

門では俗言古言にはにてといふ處之押しさるゝの被の字の意之壬生念佛之  
京都壬生寺にて陰曆三月十四日より廿四日まで行はるゝ念佛にて其間躍  
有り附意斤在所の人杯の壬生寺に詣で京の町衆の花見をうらやみ杯する  
さまなるべし

東風おせに糞のいきれを吹きまはし

全

東風かせの俗言をとりたるといきれは臭氣なるべし此句田夫野人の語を  
全くとりたる之附意は壬生寺のあたり在處のさまにて門で押しさるゝとい  
ふを噂になしたる之

た、居るま、ふ肱まつらふ

野坡

たいて徒之いたづらに居るまは隨の字の意にてまにくといふ肱とかひなとよむべし常の力業する人の何もせず居れば肱の痛み杯するさまにて百姓とも仲士とも何とも定めがたければ前句に附けて田夫のやうにさかしたるこ

江戸の左右向ひの亭主登られて

芭蕉

左右の沙汰杯いふ意左右の下ににを添へ亭主の下にのを添へてきくべし登られは被の字の意にて此句には敬ぶさていふ詞之此句は江戸の左右に就て向ひの亭主の登られて我は徒居るまに肱まつらふとさくべし此向ひの亭主は朋友杯のやうにさこゆるこ

こちらにえいまとおら白とあす

野坡

こちらは此方之いれどは要れどにてどはどもの意之こちらにもものは何も何ものもにて向ふにもといふ意をさかすも之則前句を殊に親しくつきあふ向ひ同士と見立てけふはこちらにも要る白なれども向ふにも要れば借すと

いふ意にさかしたるこ

方々に十夜のうちのぬの音

芭蕉

方々といふ詞にて前句に通はしたるにて十夜のうちはあちらにもこちらにも餅杯つくさまにさかしたるなり

桐の木高く月さゆるあり

野坡

此句のなりは末なりにて俗言のはいといふ意之附意は方々よ十夜の証のさこの高き桐の木に月の冴るさまなれと十夜は十日十夜念佛を修する法會なる故十夜に月よくひらき合ひたるこ

門をめてたまつゝ寐たる面白さ

芭蕉

たまつては黙つて之面白さは前に解きたれども此句にはし状の本をうけたる之則れもしろしきくと活く形状言の本おもしるをうけたる之而してさの意の前の迷惑さにかゝる事なし此句は凡例よひきたる閉關の説の人來れを無用の辨有り出ては他の家業をさまたぐるもやし尊敬か戸を閉ちて杜五郎か門を鎖さんには友なきを友とし貧しきを富めりとして五十年



の顔夫自ら書し自ら戒禁とあすといふ意なるべし附意は桐の木に月の牙  
るに門しめて寐たるさまなれど前句の高くといふ詞隠者の心中とひいさ  
合ひたるべし

ひろふた金て表あへする 野 坡

ひろふたと俗言之古言ならばひろひたるとなすべき之金では俗言之古言よ  
は金にて之するは爲る之此句道徳に叛きてすまざるやうあれども前にも  
辨したる如く附句はみな寓言なる故盗人を自の句になすとも妨なし然れ  
ども此句の如きと今の俳諧にて用捨有るべし附意此句者前句の閉關の説  
の意杯なる事をよくしりてわざと魂をかへて俗になしたるなるべし

初午に女房のおや子振舞ひて 芭 蕉

女房の親子の女房の父母兄弟杯なるべし附意は前句僥倖有りたるさまあ  
れを久しふり女房の親子杯振舞ふ貧しく賤しき人の形容なるべし

まよあの春えすまぬ牢人 野 人

また原書又と有れど未だならんか假名になしかきて後の人の者を待つ牢人

諸注浪人といふ一書に元祿の頃は浪人を牢人と書く白氏文集に牢落と  
有れど浪人と書きたる物は元祿以前澤山有り此句又此春も濟まぬとな  
時は牢人よても浪人にてもきこぬがたし故まだと假名にて有りしを又と  
書誤りたるか假に未だとして解する時は初午に女房の親子杯うちよりて  
其人の噂するさまにて未だ此春も濟まぬに在る人は此人等の親屬杯に  
やあらん幕府の頃大阪には初午に東西の御番所の縦覧を許されたり他國  
にもかゝる事の有りや此事此附句は聊より處有れば参考のためしるしか  
く

法印の湯治を送る花さあり 芭 蕉

句意はきこぬたる通りにて法印の湯治にゆかるゝを送るさまなれど前句  
を諸注の如く浪人となす時は此附きこぬがた故又前句は牢人にて無實  
の災難に逢ひて囹圄に在る者杯と見立て法印に除難の加持杯を頼みし意  
にさかしたるか而して花さかりとあし前句しづみたるを花やかに轉した  
るならん又此巻云表の月六句目に出てたれば月の座に花をくり上げたる  
なるべし

あま手と下りて青麥の出来 野 坡

なは手と細手暇杯と書く青麥の出来の下に見ゆる杯いふ意をふくむ附意と法印の湯治を送る道のさきなればしさいなし

どの家え東の方よ窓とあけ 全

どのと何の之附意青麥の出来に農家の並びたるさまなればしさいなし

魚にくひあく濱の雑炊 芭 蕉

魚にのよ文字下の雑炊まで意通じたる之則いつもく魚の入りたる雑炊なる故此雑炊を喰ひ飽きたるにて此には俗言のてといふ意あり附意は前句を漁夫の家杯と見かへたるなり

千鳥啼く一夜くよ寒うあま 野 坡

寒うはくの音便にて轉したる俗言之ありは成の字の意附意は磯邊のさまあるのみ

未進の高のもてぬ算用 芭 蕉

未進の高は上納の金杯の未だ納まらざる高なるべし此未進高のいつまでも果てずして夜ごとく算用をすが如き意にさかし前句の一夜くといふに通はしたる附意あり

隣へも知らせず嫁をつれて来て 野 坡

隣へは方の字の意之知らせずのせと令の字の意にて前に娘をかたう人に逢とせぬといふ處に解きたるが如く知らさずとする時は我より他に知らさぬ意知らせずとする時は他より我にしらさぬ意なり故に未進の算用をす家にて隣の嫁の噂するさまにて此句を他となま前句を自となしたる附方なり

屏風の陰に見ゆる菓子盆 芭 蕉

句意はきこねたる通り之附意はふと隣の家にゆきたるに屏風の陰に菓子盆杯見えて嫁つれて來たるやうに見ゆるさまにさかしたるなるべし一書に雜の擧句の事を辨したれど前句雜あれば擧句雜勿論なり



三吟

兼好ももの何も何ものも織りけり花さあり 嵐雪

兼好ものも何も何ものも織りけりと有り過ぎし事をいひ定むる天爾波之借此句の兼好もといひて兼嫌ふひとしき人を詞の外にさかしたるにて兼好法師の阿部野にて延織り居たる昔を思ひやり花さかりの人のうるゝ頃も清貧を守り居る隠者を形容したる之而して嵐雪自らの身の上をいひたるも他の隠者を賞したるも端書杯なければさし定むべからず

薊や昔に雀鮓も 利牛

薊アザミや昔アザミのやは中のやにて前にも解きたる如く詠の詞にて冠の意なりもは盛の字にて四段活の詞盛るゝ断止段にて此脇と助詞にてとめたるあり雀鮓ツグは小魚の鮓之附意は發句を清貧者と見立て客をもてなす雀鮓も薊や昔の葉杯にもるもの足らざる貧交のさまなるべし一書に此雀鮓を昔薊杯の廣葉に蜘蛛の卵杯産みつけたるを雀の啄みて子を飼ふをいふと有れど迂遠なるべし又附意もさこねず

おた道を春の小阪のおたままで 野坡

新道杯の春の往來にかたまりたるさまあるべし附意は青葉に鮓もる野遊杯と見立てたるからん此句のてとつかひ捨てたる故前後の句にうち合ひたり

外とさまくに圍ふ相撲場 嵐雪

さまくは何處かの里言ならん龜末の意なるべし附意の相撲場杯の出來て道ふみかためたるさまなるべし但し秋にうつしたる之

細々と朔日頃の宵の月 利牛

此朔日ツイダチの一日をいふにあらで七八日頃までの月をいふといふ説多し或は然らん朔日ツイダチのつきたちにて月の始晦日ツキグサはつともりにて月の籠る意なりされは附意と宵月に相撲場のこしらへ杯するさま之但し今の俳諧にはかやうなる解さがたき事をいはず三日四日頃とか七八日頃とかなし たる方よかるべし

早稻元晚稻元相生に出る 野坡

出るは穂の出るなるべし早稻のおくれて晩稻の頃相生に出るさまあらんかされば附意と前句を八月の昇月となしたる之此早稻も晩稻ものもにて其他の作物も遅速のみたれたるやうにきこゆる之

泥染と長た流にのをすらん 嵐 雪

泥染は一書に下を漆にて染め其上を泥にて染むる黒き色之澁染ともいふといへり又下を五倍子にて染むるともいふ鉄氣水杯にて染むる大師染の類ならん長き流と溝川杯ならん此句のらんは上にやか杯の疑なき故推量の意之附意稻の中の長き流に泥染あすをこなたより見たるさまあり

あちこちすきは晝のあねうつ 利 牛

すればは爲ればにて爲爲爲爲爲れと活く詞の已然段をばのうけたる故已にあちこち爲れば晝の鐘うつといふ意之若未然段にてあちこち爲ばといふ時は晝の鐘うつらんとあつべしとかなすべしこれらの詞にて未然段と已然段とのわかれをしるべし附意爰には前句の泥染を爲る人のいそかしさまをさかしたるなり

隣あら節々嫁杯呼ひに來る 野 坡

隣からは俗言にて古言のよりの節々は度々之附意は度々呼びに來てあちこちすれば晝の鐘うつさまにて其何の故に節々呼ひに來るやは次の作者の思はくに有るべし

てふくは喋るにててふくは喋るは漢語を形狀言になしたる之斯の如く

なす時と一のしき狀の詞になりて則喋るししきしきと活くなりかひわりは貝割菜なるべしさして響むべきやうのものにあらざるを響むる故喋るしくといひたるなるべし喋るしくものもの詠のもにてさてもといふ意之附意は前句の嫁を姑とをりあひあしき嫁杯とあし隣の人の隣みて節々呼ひに來れば其嫁の追従に貝割菜杯を響るを姑のあなてふくしくも貝割杯響るよと思ふ意をさかしたるなるべし但し貝割菜は例に秋季なれ爰より前後雜されば雜と見るべし

黒谷のくちを岡崎聖護院 利 牛

黒谷岡崎聖護院と落東乃地名なれば前句の貝割菜を畑と轉したるあるべし

五百のうけと二度に取りけり 野坡

懸乞にて冬季之岡崎聖護院あたりに貧家あるさまに思はしたる附意なりけりの解は前に度々有り

綱ぬきのいほの跡ある雪のうへ 嵐雪

綱貫と草にて製したる沓にて裏に洗を並らへ雪の道をゆく具ある故搦杯ととも又冬季となす附意は懸乞の沓なるべし

人のさはらぬ松黒むあり 利牛

人のはらぬは手入せぬ之黒む之のありは末なりにてはいといふ意之附意と雪に綱貫の跡ある道端の松とあしたるのみ

雑役の鞍とぬるせを日お暮きて 野坡

鞍をおるせとは日然段のせをばにてうけたるにて日に鞍をおるせはとい

ふ意にて前のあちこちすればといふことわり同じ俗言のおるすといふ意之一書よおるすといふ直したり古言を俗言に直し此句をあさましくしたる之此句をおるすといふ直すぞならむ前のあちこちすればもそると直すべき之日が暮れてのがは俗言之古言には日暮れてとなす處之附意は前句を此家のあたりの松となしたる之前句は人のさはらぬ松といふばりなる故人情をたす時は大ていかやうの附方になるべし

飯の中なる芋とほる月 嵐雪

中なるはに有る緋り之は芋飯にて月の明りに芋をほり杯して喰ふさまなれば前句を馬曳杯とる賤か家とあしたるなり

漸と雨ふまやみ秋の風 利牛

長々の雨のやうやくはれて月見ゆるさまの附方あればしさいなし秋の風は秋季をつれたるべし

鶏頭見玉を又軒おく 野坡

見てのは天爾波を天爾波にてうけたる之眼を開きしはし鶏頭を見てと又

眠るさまなれば長雨のやこれたる静なる趣見ゆると

奉公のくる志き顔に墨ぬりて

嵐雪

前句を丁稚杯の草臥れて睡るものと見立てたる之朋輩杯の徒に顔に墨ぬりたるにそれをもえらす鶴頭見てと又駟かくさまにて此句のぬりてといふて文字よて此句を前句のうしろにもたしたる之

抱きあくる子の小便をする

利牛

前句を子守奉公杯と見立てたるにて此句はくるしき顔といふ余意をうけたる故打越に轉し たる之

くわたくと河内の荷物送りあそ

野坡

ぐわたくとこのとは準ふると之河内の荷物諸注三才圖繪によりて鍋といへどこは穿鑿のし過ぎならん此句にはもとより前後の句につきても此荷物はいかなる物ともさし得る處なし附意はぐわたくと荷を送りおけたる故子を抱きて退きたるさまなるべし

心見らる、箸のせんたく

嵐雪

心見らるゝと被の字の意之箸のせんたくと洗濯にて客の膳に洗ひたる箸つけて儉約の度に過ぎたるを恥づるさまあらんおされば附意は荷を送りおけたる人をもてなすさまあるべし

婿も来て娘の世とを成まよけり

利牛

婿がのがは婿を重くさかしたるかり娘のののは娘を軽くさかしたる之娘の世とはなりにけりといへば娘の方重きやうおれども婿は主人公あり且婿が來たる故娘の世となりたるなる故婿の方を重くさかしたるにてがどのとのわかれ又古人天爾波を用ゐるに龜末ならざる事見るべし附意と此家の先代とはかはりたる事を他の人の思ふさまにて前の心見らるゝといふを強て心見んととなさいれど其おすさまの表にあらはるゝ事につきて自ら見らるゝ意にて前句の被は人に見らるゝ意おれども此句には自ら見らるゝ意にさこゆる之

ことこの暮を何も囉はぬ 野坡

今年の暮はといへば去年も去々年も物羅ひたるやうにさこゆる之此意を

以て婿が来て娘の世と成り先代とはかはりたる意に通はしたるなり

金佛の細をお足とさするらん 嵐 雪

金佛といふより細き一足は錢をおあしといふにいひかけたるにて今年  
暮は何も囉はぬといふ坊主となし其坊主をこなたより思ひやりたる附方  
なるべしこはらんといふ天爾波よてかくきこゆる之一書に此らんをなり  
と改めたしいひたるは古人の天爾波に意をこめたるを解し得ず自己の小  
見識をたてんとする嗚呼極まりたる説之

此ろいあいの小鳥みあよる 利 牛

かいわいは界淮又界隈杯いふ説有り俗言に多くいふ事にて此あたりとい  
ふよ同じ附意と涅槃の佛といふ注多しさもあらん

黍の穂は残らず風にふた倒さ 野 坡

句意解に及ばず附意も折れたる黍の穂よ小鳥のよるさまなればしさいな  
し

馬場の喧嘩の跡にすむ月 嵐 雪

前句黍の穂の残らず倒れたるすさまじきさまなれば其余意をうけて喧嘩  
の跡の月となしたる之こゝに聊いふ事有り前句若唯黍の穂の残らず倒れ  
たりとばかりあらば此句はたらきなかるべし前句黍の倒れたるは其故を  
風に吹き倒れとことわりたる故此句は一句たちてこたらきたる之附句の  
一句たつとたゞざるは此けぢめに有るなり

弟をとうく江戸て人に成る 利 牛

とうくは俗言到々の意か古言又は遂にといふ處之江戸でも俗言之古言  
にはににて杯いふ處之人に成るは身を立てたる之此弟と放蕩者にて前  
家を出てしか遂に江戸にて人よ成りたるさまにて此江戸といふにて家敷  
奉公杯して人に成りたるやうにさかし前句の喧嘩に通はしたるあり

今よ庄屋の口いほとけす 野 坡

前句の弟を田舎の者杯となし江戸にて人に成りたれど前になしたる悪事  
杯有りてものがたき庄屋の口は今にはとけすとなしたるなるべし

賣人あらうつてみせたるたき鉦 嵐 雪

賣人からは俗言にて古言のより見せたるはて有るの拘りなれど此句にはて居るときくべし附意は聊遠きやうにて解しがたけれど買人の鳴らし試さる故賣人よりうちてみせたるさまなれば此もどかしき意を前句にひいかしたるか

ひらまくと雪のふり出し 利牛

ひらりくとは準ふるとの附意此句の如きはいかやうにもきあるべけれど冬は十夜達广忌聖一忌唯广忌杯さまく佛事の多ければそれらをこゝるよもちてつけたるか

鎌倉の便きあせよ走らす 野坡

走らするの命の字の意にて走ら合むる之急く事有りて雪のふり出すに人を走らしむるにて鎌倉の便は寓言のみ

あした所のしれぬ細引 嵐雪

前句を旅立杯と見立て其用の物をつけたるなるべけれど走らすといへば急ぐをりあるに必用の細引杯のしれざるさまにさかしたるなるべし

一人ある母とす、めと花の陰 利牛  
前句の細引を母を花の有る處へ負ひゆき杯するに用ゐるものとなしたるか

未たあひのこる正月の餅 野坡

花のさく頃まで正月の餅の饅び残りたるわびしきさまあれば登しき中より母に孝養なすさまにさかしたる附意なるべし

○ 深川よまありて

空豆の花咲きにけり麥の縁 孤屋

端書ハナガキの深川と深川の芭蕉菴あるべし空豆ソウマメの蠶豆カズマタとも書く麥のみどりなる縁ヘリに空豆の花咲きたる色淋しくして艶なり

晝の水鶏のいしる溝川 芭蕉

晝ヒルののは珍しき杯いふ事をもたしたるの之此の文字に他にいふべき



事をもたしたる譯之前に度ふいひたれど此句につきて聊いふ事有り水鶏のはしるとなしたるのは唯ののにて俗言のがにも通ずるなり畫の水鶏となしたるのは他いふ事をもたしたるのにて俗言乃がに通ずる事なしこゝに上ののと下ののとの重さと軽さとのわかれをしるべき之附意は發句の麥畑のあたりに溝川有りてそを畫水鶏の走る淋しきさまなり

上張と通さぬほどの雨降まで 砒水

上張はうつぱり杯いふ物ならん又旅行に着る木綿杯にて仕立てたる合羽といふものともさくべきか通さぬほどは俗言之古言にいはかりとあす處之はどのほこまのき杯いふ意をふくみたり降りてのては前後の句にうち合ひたる之附意は上張を通さぬ程の雨ふる靜なる趣にて脇句の畫水鶏の走る淋しげなるに通はしたるなるべし

ろつとのろけは酒の最中 利牛

そつとはそとの入りたる之とは準ふるとこそつくりと杯いふ俗言にて準ふるとなる事しるべしのぞけばと已然段をばよてうけたるにて已にのぞ

きたればといふ意之野意は前句を雨舎となしたるにて其のろきたる次の間なるう窓杯なるかいのやうともさくべし

寐所に誰も寐て居ぬ宵の月 芭蕉

句意はさこむたる通りあれども附意は此句を前句のうしろにもたしたるにて寐處を見るに誰も寐て居ざる故他の間をそつとのぞきたれば酒宴あし居るさまとさくべきなり

とたりと塀のあろふ秋風 孤屋

とたりとのとは準ふるとこゝろふは倒るゝ之此秋風之暮風之附意は塀の倒れたれば誰ぞ起こさんと寐處へゆきさるるに誰も寐て居ぬさまにさかしたるにて此句は前句の次の事をいひたるなり

きまぐす薪の下より鳴き出して 利牛

きまぐすは葦又蟬蟀と書く説繁ければ略す薪はまさとよむべし下よりは古言之俗言よからといふ此附意聊こゝろゆかざる處有り前句塀の倒けしと有らばし過去なる故此句つくべしこゝろふと有る故塀の現在にこゝろふ

さま之此さわがしき中に蜚の鳴出してとあすこうつりよろしうらざらん  
前句こけしなるを梓行の時誤りたるか又此句者の前句をさし誤りたるか  
猶後學者の考を待つ

晩の仕事の工夫するあり

碓水

此句のなりは未なりにて俗言のはいといふ意之附意は薪の下より蜚の鳴  
き出すを夕暮近き頃と見立て今夜なすべき事を思案するさまなるべし此  
句鳴出してにうち合ひたるこ

妹とよき處めらもらなる

孤屋

よき處からは俗言にて古言のより之此詞打越に薪の下より有ればあらと  
いひかへても意同し事なる故よるまうらざらんもらはるいは被の字の意  
之附意と前句を盡も夜も問なく稼く貧しき人と見立て妹をよい處よりも  
らはるは僥倖のさまにあらしたるあるべし

僧都のともまつ文とやる

芭蕉

前句の妹の親戚の人杯の僧になりて遠方に在るさまにて其許へまつ文を

やるとなしたるあり

風細う夜明めらすの鳴きわたる

碓水

細うとくの音便にて轉したる俗言之附意は朝まだきより遠方へ使をたつ  
るさまならん此句の如きは唯夜明のけしきをいひたるのみなれば猶他に  
さしやうも有るべし一書に前句の僧都を兼好となし小倉の頼阿の許より  
横川に使をやるさまと注したれど此二句の間にさやうなる佛も見ゆす  
家の流れとあとと見にゆく  
利牛

鯨汁めめい者よまよくありて

芭蕉

若いはきの音便にて轉したる俗言之者よりはまざるよりといふ彼より是  
のまざる意なり但し薪の下より杯つかふよりも本議たがふ事あしよくな  
りては進む意にて里言之附意は家の流れた跡見に行き杯するを壯健なる

爺杯となまたるなるべけれと又出水に鯨杯の多くとれたるやうの意も有らん

茶の買置を下多て賣り出す 孤屋

句意はさこねたる通り商人のさま之附意は前句の鯨を氷もどけ暖くありたる頃と見立て新茶の時もやく近づきければ買置を下けて賣り出すとあしたるなるべし諸注或は老巧の商人或は勘定酒杯いふはいかにならん

この春をどうやら花の静ある 利牛

どうやらどうは何うにてやらは何や何らんを略えてやらんとなし又んを省きたるおれば古言のいかならんといふやうおれをさにはあらずして推量の意にいひならしたる俗言之静なるはに有るの拘りたる之附意のこの春は花の盛も静なるらんと思ひやる淋しげなる意にて茶の賣れがたければ直を下げて賣り出すといふ意も通としたるなるべけれと又新茶の時の近づく意にもうち合ひたるこ

おまじ柳枝今にとこみま 碓水

かれしは過去之これらのしは正しきつかひさま之今にといへばかれて久しくなるやうにさこゆる之附意はをしみてといふ詞にて前句の淋しげなる意に通はしたるよてて文字の前後の句にうち合ふ事は前に度々解きたるが如し

雪の跡吹きはめしたる 朧月 孤屋

雪の跡吹きがしたるはいと寒きやうにさこゆれを朧月といふにて春暖を微催はまたるやうにさかしたるにて柳の枯れす有りたらば芽を出す頃なるにといふ意になしたる附方なるべし

ふとん丸けてもの思ひ居る 芭蕉

丸げは元來丸さうに杯俗譯する形状言なれど此句の如くつかふ時は丸げ丸く丸ぐる丸ぐれと下二段活の詞になる之雪丸げ杯いふ詞は是より附意は雪吹きはがしたる風の夜に君待ちわふるさまなるべし但し此句は冬季にて季うつりにあしたるこ

不届な隣と中のあるうあま 碓水

不届きはあるのるを省きたる俗言之わるうはくの音便にて轉したる俗言  
之ありは成の字にて天爾波にあらず附意此不届なは娘の親杯のいへる事  
にて垣を越えてしのびあひたる息子を怒りて隣と中のわるうなりたるを  
らんかされば前句の物おもひ居ると娘之

まつち坊主扱上へあめらす 利牛

はつち坊主は鉢坊主之此附意未だ然りと思ふ注解を見ず愚考も未だ然り  
と思ふ事なれど中のわるうなりたる隣のを事は我に關係のなき事まで  
も都てこゝろよからず思ふ俗情にてあゝる穢げなはつち坊主を上へあら  
して何をなすにや杯とこあたより見やりたるさまあらんか

泣く事のひろめに出来し淺ちふに 芭蕉

出来しは過去之淺茅生には上の出来しへかへる天爾波之淺茅生之菴生蓬  
生杯いふが如く斤里の事にて此句にはわび住ひ杯いふやうの意にきくべ  
しこと御傘にも淺茅生は居所又二句去又植物之といふにてもしるべし淺  
茅生にわびしく世を憚るをりしも泣く事の出来し故ひそりにといへるに

て人に明かす事能はざる悲しき事の出来しやうに解きたるものと非ある  
べし附意泣く事は人の死したるにて世にある時ならば尊き僧をも招くべ  
けれと淺茅生のわびしき住ひなればはつち坊主を上へあがらそさまなる  
べし前句のをかしきを哀に轉したる至妙の附さま深く味はふべし

おたあすれたる金扱尋ぬる 孤屋

句意ときこわたる通りにて附意も泣く事のひそかに出来しを金を失ひし  
と轉したるのみ

着のまゝ、ふまゝゑんて寐まを汗とめき 利牛

着のまゝは古言にて正しきつかひさま之すくんでは俗言にて古言よはす  
くみてとあす處之寐ればは已然段をばにてうけたるにてこゝには寐たよ  
つてときくべし此附意解しかだし一書に前句を夢に轉したりといへどお  
ぼつかなし又一書に旅籠屋に丸寐して追劍の夢に驚きうちがひ解かれし  
ると狼狽してそこら尋ねやゝ置處思ひ出しおちつくさま之といへど迂遠  
ならん此句のすくみて寐ればといふ處に附意あらんすくみて寐たる人と

金を尋る人とは別人よて此金につき疑はれ杯したる人のすくみて寐たるにはあらざるか猶後の人の考を待つ

客を送りて提くる燭臺 盛水

こと燭臺を提けて客を送るとききくべし附意と客有りし故着のまゝにすくんで寐たるにて下部杯のさまなるべし但し前句の汗をうきのこと四段活の續用段にて過去の詞なる故すくんで寐て汗かきし後の事ときくべし

今のまに雪の厚きとさしてみる 孤屋

厚さのさこみといふも同じやうなれど意たがへり厚みといふ時は厚み厚むと活く詞になりて筈をあらみ世をはかなみ杯いふが如き意之厚さ深さ杯之外より内を思はするこゝろ厚み深み杯は内より外へかけて思はするこゝろになるこゝろは此句を解くにさして用をきやうなれど此句の如きと正しきつかひさまにてみよすべからざることもわりをしるしおくことさしてみると試の字の意之附意は客送る燭臺を提げて居る間に其明りにて雪の厚さをさしてみるとなしたるなるべし

年貢をんたとほめられまけり 芭蕉

すんだのんをみとなす時はすみたとなれといづれも俗言にて此たは古言ならばしとなす處にてそみし之譽められと被の字の意之にけりの解は前に有り附意と年貢も済まして心もしばし余暇あれば雪の厚さ杯さしてみるさまなるべけれと又年貢納むる時を雪にうち合はしたるあるべし

息災に祖父の白髪のめまたさよ 盛水

息災と息災延命杯いふ語より壯健なる事をいひならしたる詞之めでたさのめでたしきくと活く詞の本めてたをさにてうけたるにてさは前の雪の厚さの處よ解きたるに同じよと詠の上之附意と年貢すまし、祖父なるべし但し此祖父は父の父といふ意よあらす唯老爺の事也

堪忍ならぬ七夕の照 利牛

こと七夕頃の残暑の嚴しきをひいたるにて堪へ忍びがたきまでの七夕の照といふ意なるべし附意は息災なれど白髪いたいきたる爺なる故暑さ杯も若き時よりと堪忍なりがたきさまならん

名月のまにあませとぎ芋畑 芭蕉

あてせのせは命の字の意たきはたしきくと活く形状言の附意と七夕頃の残暑に芋畑の世話なし居るさまなるべけれど未來の名月にて月をもたしたるこ

すたく いひて荷ふ落鮎 孤屋

すたくは俗言喘息々々杯いふ意の附意は芋畑のあたりをすたくいひて鮎荷ひゆくさまなるべし

このころは宿の通りもうすらすと 利牛

薄らぎはらぎらくと活く形状言をらぎしのしは過去之落鮎を澤山荷ひゆくを暮秋の頃と見立淋しきさまをつけたるなるべしそたくといふにて澤山のやうにきこゆるこ

山の根際の鉦めすめあま 盛水

此句のなりは靡なり之附意と宿の通りもうすらすと静なれば山の根際の

鉦もかすかにきこゆるさまなるべし

横雲にうよく風の吹き出す 孤屋

句意はきこはたる通り附意は山の根際の鉦の音をそよく風の吹きおくるさまなるべし

晒のうへに雲雀さへつる 利牛

句意附意ともしさいなければ解およばす但し前句の出すも此句の轉るも詞の末なればさへつるし誤寫にもやあらん

花見にと女はおりおつれたちて 芭蕉

此花見は花見といひつゝけて二字を一語の名詞とあしたる之又花を見よといふ意につかひてを文字を省きて花見にとする時は花は名詞にて見よ一段活の動詞にとの下又思ひて杯いふ意をふくむ女ばかりは男女有る中女ばかりといふ意なれば古言之ばかりがのにも通するやうなれど男女の中女の方を重くきかするが之附意は布晒したる上に雲雀の囀る野邊を花見にとて連だちゆくさまなればしさいなし

余の草あしよ莖たんや

試水

余の草は外の草なしにとなしたるなし天爾波のやうに見ゆれど草の有無につきたるなしなる故天爾波にあらま寐ともなく寐すともなしに杯つかひたるは天爾波之此句杯につきて天爾波と動詞とのなしを辨ふべし附意は野邊のさまなれば打越に轉しがたきやうなれど余の草なしにといひて女ばかりといふに對し野邊を形容したるからん一書に斯の如き附法は檀林のさたえといへど七部集中にまゝ有り此説の如きは念佛宗の經宗を頭にいみ嫌ふがごとし

芭蕉 孤屋 試水 利牛

各九句

○

百類

子は裸父をまゝ、れて早苗舟

利牛

て、れは裸父と書くふをせし之子は裸父はて、れといへば子は襦をも着けざる之親子裸体にて早苗舟さす近昔の田夫のさまあるべし

岸のいもらの真白よ咲く 野坡

蕨は五瓣の白花咲き匂ひ有るものにて薔薇の類之咲原書假名をかくらざれと咲くと断止言にあすべき之此脇は動詞とめ之附意は早苗舟に岸とあしたれば發句の場所にてしさいなし

雨あめり珠數懸鳩の鳴き出志て 孤屋

珠數懸鳩は頂下に蒼黒色の輪有りて頸に珠數をかけたるが如き故の名之其鳴聲老人來よといふに似たり附意の岸には蕨の花真白に咲き匂ひ山鳩の啼き出す雨はれのさまなれば淋しみ言外にあふるゝなり

與力町をりむあふ西風 利牛

與力町より西風に向ふときくべし與力町へ出るまでは南か北か向きて歩きたりしに與力町より西向きたるさま之附意は此處に珠數懸鳩を聞く雨上りにて又淋しき與力町なるべし

竿竹と茶色の細たふりよせ

野坡

前句を興力町より吹き来る烈しき風となし竿の干衣とりいるいさまに赤  
したるなるべし茶色の細は寓言にて後句に興へたるなるべけれを後句に  
はこれを奪はず

馬めをまきてめく人聲

孤屋

馬がは俗言古言にはのどすべき處之わめくと俗言をれど何めき何めく杯  
いふ形状言の附意は前句の細たくりよするを婦人と見立て馬のいわれて  
人のわめくを驚くさまならん

暮の月千葉の茹汁あるくさし

利牛

千葉の茹汁とよむべきか一書に千葉の茹汁と訓したれど上を千葉と湯桶  
によむよりは下を茹汁とあす方よりらんか附意此千葉は馬の飼葉なるべ  
しこは茹汁のわるくさしといふにて人の食する千葉にあらざる事しらる  
い之諸注に大百姓の夕飯支度又飯時杯いへるはみな非ならん

掃けばあとあら檀ちるあま

野坡

掃けばは已然段をばにてうけたる故已にこけばといふ意之あとらは俗  
言にて古言のよりの散るありと末ありにて俗言のはいの附意は前句馬の  
詞葉なれば馬丁仕丁杯下部等のせわしきさまなるべし一書に此句のはけ  
ばをこきたからといふ意之とてこけを直したれどこは已にはけば又其  
後へ檀ちる之といふ意なる故はけばは正しきこ

ち、めきの中てほり出するりほあめ 孤屋

ち、めきはひさこ集にいひたる如く鳥の鳴きさわぐをいふあらん中では  
俗言古言のに之翠鳥類赤は共よ小鳥の名の附意は鳥さし杯にて軒の檀の  
下に小鳥ゆるさまならん

坊主にあれとやまり仁平治 利牛

なれど已然段をばにてうけたるなりやはりは俗言にして意地強くいつまで  
も矢を張る杯いふより起りし詞か附意の前句の鳥ゆる人にて齡とりたれ  
ば頭は剃りたれど猶家業につながれ仁平治にて居るさまなるべし

松坂や矢川へまゐるうら通 野坡



松坂やは詠のや之松阪も矢川も伊勢の地名にて松阪の矢川ともいふべきを  
松阪やと詠めたるは岡崎や失矧の橋杯いふに同し附意は此處を前句の仁  
平治の住家杯ときりしたるあるべし序にいふ此句もし松阪の矢川へはいる  
裏通となさば唯處書にて句にはあらざるべし松阪やと詠めたるにて句に  
ありたるなればや文字の妙用しるべし

吹あつ、餅もつらき闇の夜 孤屋

吹かるゝは被の字の意之餅ものもは何も何ものもある故餅もといひて其  
他のつらき事を思ひしたる之附意と松阪の女耶屋の小女杯の裏通の闇よ  
吹かるゝさまなるべし

十二三辨の衣裳のうちろるひ 利牛

十二三は宦人の數ならん辨の衣裳は辨宦の装之同し装したる辨宦の十二  
三列なりたるなるべし附意は何かの夜の行事にて此花やかに装ひたる辨  
宦を餅の手吹かるゝ人の松明のあかり杯に見やりたるにて人々の品々有  
るさまあるべし

本堂をこる音をとろく 野坡

とろくははしる音あるへし附意は寺中にて行事杯有るさまになしたる  
のみ

日のおとる方もあむ竹の色 孤屋

みどりある深き竹林に不斷日のおたるかさばかりあからみたるにて此竹  
林のあたりに本堂有るさまあるべし

只たれいさよ口をく水 利牛

句意解に及ばず附意も竹林の奥杯にうつくしき水の有りたれば口そく  
となしたるなり

近江路のうらの詞とき、初めて 野坡

近江路のうらの詞一書に湖東にてたどへり行かうといふ詞を行かずとい  
ふ如くものをあちらこちらにいふをうらの詞といふ之又一書に予等とい  
ふ事を己等といふとて己等の詞とていへりことうらと浦にして滋賀の浦  
眞野浦杯の里言を浦の詞といへるならん膳所は貢の魚を漁る故おもものが

浦といへど今處の人かもろが濱杯いへる類なるべし句意は都より旅立ちて近江路の浦の詞を聞きうめたるにて附意は此あたりのうつくしき水に口そいさたるならん

天氣の相よ三日月の照 孤屋

相よは詠のよ三日月の相にて晴雨を計りたるにて俗に三日月立ちたるは晴伏したるは雨杯いふ意なるべし附意は前句を旅と見立て近江路に來たるを三日月見ゆる頃となし旅中なれば翌日の晴天をも願ふさまなるべし

生あめら直ようちあむひしと漬 利牛

鯉は小魚にて鱒の種類之附意は夕月に網引の鯉を漬るさまなるべし但し此句浦のやうにきこゆれば打越の浦の詞にいらい

棕の實落つる家根くさるまゝ 野坡

落つるは靡くさるなりは末なりにてはい之附意は鯉漬杯する小屋の家根あるべし

帯うりのもととり連立つ花くもり 孤屋

句意はきこねたる通りなれど附意解しがたし前句棕の實かつるは秋季なれどもこは花の頃まで落ち残りたる實有りともすべし此句の帶賣棕の實に縁有るや腐りたる家根に縁有るや未だ詳にせず一書に黒縞子の星ぬきに棕の實を用ゐる事を以て解きたれど迂遠なれを然りとも思はず若<sup>ツ</sup>棕の實にも腐りたる屋根にも縁なしとする時と唯淋しげなる處を商人の連立ちもどるといふのみにて粗ならん猶後の人の考を待つ

御影供とるの人のろをつく 利牛

句意は解に及ばず附意は花曇に御影供と時候をあつし人のろはつく花の頃のさまなれど此句も帶賣に縁有るやうにきこねす

ほあくど二日冬のいほひ出て 野坡

ほかくとは準ふるといほひは流をいほひいほふと活かし名詞の動詞に成りたるならん出で原書おくり仮名なけれと出で出づと活く詞ある故おくるべき之但し句には濁点を施されば此詞の如きあしくよむ時は出

てとなるべし猶此類の詞有れば此句につきていひおく之附意は暖なる頃にはかゝると灸のいほひたるなるべけれどわしくいふ時は聊こゝろゆかず二日灸は二月二日にして御影供は三月廿一日其間凡五十日有り故に二日灸の今に癒ぬすと有れば然るべしいほひ出でといふ時の二日灸の此頃にいほひ出でたるやうにきこゆるこは梓行の時の誤寫か句者の處か

はるくあへは一書に箒木の和物又大和の法輪味噌杯といふ未だ詳にせずはるく和といふ名につきてこぼるゝといひおけたるなるべし附意は灸のいほひたる人のものくふさまなるべし

あい袖と振てみずるも物おもひ 利牛

ないはきの音便にて轉したる俗言之振てみずるも物おもひ此句の如きはふつてと俗言にすべし見するの命の字の意之もは何も何ものもここのな袖とふられず杯いふ俗言をとりたるかり又見するものもにて何やかや心に任せぬ事をさゝしたる之附意の物思ひつゝくふ和物こほすさま杯に

やはるくといふ詞の拍子にも通はしたるか一書にはるくといふを浪人の昔をしのふ物思ひと見つけたりといふ

舞羽の糸も手につかず縁る 野坡

舞羽の糸をさぐる具之糸ものもは何も何ものもなる故其他の見る物も聞く物も心に添とさるやうにきこゆる之附意は前句のもの思ひを頼て戀にかしたるこ

段々に西國の武士の荷のつとひ 孤屋

段々は俗言せんぐり杯いふに同しつとひは集りこは間の宿の旅籠屋杯の客の少き時は糸くり杯するさまにて段々に西國武士の荷の集ひたれば舞羽の糸も手につかず急き操るさまにきかしたる附意なるべし

なほきのふよま今日は大旱 利牛

きのふよりのよりはまさるよりといひてきのふよりけふはまさる杯いふ意之此句くわしくいへばなほといふ詞不要之きのふよりけふの大旱といへばなほはいはずともきこゆる之古人も折又は斯の如く天雨波を殺さる

事有れば志有らん人は天雨波をつかふには心をつくすべし附意はさふも暑かりしか今日のなほ大旱なるに西國武士の荷の段々集ひ爲す事此多きを困るさまなるべし

切蟻の喰ひ倒したる植たはと

野 坡

切蟻は虫之植たはこは夏なるべし附意は日でりにて食を虫のくひ倒したるあるべし

配り納豆と仕込む廣庭

孤 屋

配り納豆となしたれば寺なるべし附意納豆は冬なれど仕込は六月なれば植莢に時候を合はしたるにて又納豆製しなから莢喰ひ倒されたる畑の際杯する田舎寺のさまなるべし

瘡日とまたらぬせとも待ちこゝる

利 牛

まぎらぬせどもせは令の字の意にて已然段をせもにてうけたる之隔日にかこる瘡病をまぎらせども持ちこゝるは此病を患ふる人の情さも有るべし附意は納豆製する廣庭杯へ出てまぎらかすさまなるべし

藤てすけたる下駄の重たき

野 坡

藤では俗言古言にはにてもて杯いふ之重たきは重たしきくと活く詞附意と藤ですけたる下駄はきてしはらく庭歩き杯したれど病中なれど其下駄の重たきさまなるべし

つれあひの名をいやしげに呼びまをる孤屋

つれあひは夫之賤しげにはさうに之我か夫の名を賤しげに呼びまはる柚杯が妻ならん附意は前句を藤ですけたる下駄を重たがる人は都人杯の山家に逗留したるよてかゝる下駄之履き馴れざるさまとなし儲其あたりにつれあひの名をいやしげに呼びまはるを都にはきし馴れざる事故をかしかるさまあるべし

隣のうらの遠き井のもと

利 牛

句意解に及ばず附意はつれあひの名を賤しげに呼ぶを町の場末とあしたるなるべし

暮の月横し負ひ来る古柱

野 坡

古柱は毀ちたる家の柱にてもはや用にならざるまで腐りたれば薪となすものならん横に負ふは長さ物なる故立には負ふべからざれば之附意は前句を大阪の長町杯となし暮の月よ乞食等の戻るさまにて其中に貰ひ來たる古柱を横に負ひたる者あるさまなるべし此句前句につけて姿眼のあたりに見ゆ淋しみも有りをかしみも有り

すゝきの長のおまるとつてい 孤屋

すゝきは芋莖にて秋季之長はたけとよむべしこつていは牛なり一書に牛に非ずといへど其文の繁きのみにてさして要なきやうに思へを茲よひひかず附意は長さ芋莖つけたる牛と古柱を横に負ひたる人とゆきあふさまにて野の道杯と轉したるこ

ひつろりと盆は過ぎたる浄土寺 利牛

ひつろりは俗言過ぎたるはて有るの約り一書に過ぎにしとする句とてにしと直したり上にひつろりと有るににしと過去のしにてうち合はず時はひつろりといふ詞過去になるこ此句は盆過ぎてひつろりとしたる

意ある故過ぎたるとすべし之此注者は過ぎて有るといふ詞をこゝるよからず思へるあるべけれど此有るは物の有無につきたる有るにあらず天示波ある故なかりけりは無く有けけりの約りたるが如しこは前にも辨したれど初學び乃人の惑はん事を恐れ又くしく辨しおく之附意は牛の芋莖を運び杯するあたりの田舎寺なるべけれど又芋莖に盆過と時候を合はしたるこ

戸をぬらぐみし居風呂の屋根 野坡

戸では俗言古言のにててもて杯をぬらぐみしは過去之此しも一書にあらぐめると現在に直したれど此句の如きは戸でからぐみたる屋根を見るは現在なれどからぐみたる時は前の事なる故からぐみしと過去にすべし之附意は前句の寺の風呂にて施餓鬼杯の時屋根を戸でからぐみてまうけしなるべし田舎寺のさま見ゆるこ

伐りすぬす撥と檜のすきあひて 孤屋

句意解に及ばず附意は前句を柵の家杯となしたるあるべし

赤い小宮を新しきうち 利牛

赤いはきの音便にて轉したる俗言之新まきうちの下にこそよけれど添へてきくべし附意は椶檜杯茂りたる森に丹塗の小宮の建ちたれば其あたり椶檜杯伐りすかし掃除杯するさまならん

濱まてを宿の男の荷とめ、一 野坡

濱まてはまでの解前に有り一書にまてはのこ不用之とて濱邊までと直したり此は有りても無くても同しやうあれど濱邊までとなす時之余意あり濱邊はとなす時と濱より船につみ杯するやうよきこゆる之茲には文字に要不要しるべき之句意と逗留の客の立つさまにて附意は濱までゆく道に小社有りて此社の建ちし時は美麗ありしかや、處々はげたり杯と長逗留を思ふさまならん但し前句の新しきうちといふは新の小社とも古びたる小社ともうこのし得らるゝ詞と

師走比丘尼の諷の寒さよ 孤屋

此比丘尼一書に賣女といひ又一書に東海道藤澤邊に比丘尼のうたうた

ひて旅人の袖乞ふあり伊勢に最も多しといふ袖乞といふ方然らんかこはうた比丘尼といふものにて袖乞の女の名とする時はしさいなければ尼とする時は小宮の打越よろしからず猶後の人の者を待つ寒さよの詠のよ之附意は前句を濱邊とあし比丘尼の聲寒げにうたうたふさまあるべし

餅搗の臼と年々買ひあへて 利牛

年々に餅つく臼をかひかへ杯するの富有の家なるべければ門に之師走比丘尼の諷寒げあるに内に之賑わしく餅つくさまなるべし

天満の状と又忘まけり 野坡

天満は大阪の地名又といへば先達ても忘れたるやうにきこゆる之けりの解は前に有り附意は年の買物杯又天満へゆきたるに頼まれたる状は届け忘れてのへりたるさまなるべければ又といふ詞にて此人は老人杯にて年々に餅つく臼もかひあふる程物事に念の入りたる人なれど頼まれし状を忘れしといふやうにきこゆる

廣袖とうへにひつはるぬの者 孤屋

廣袖をうへにひつとるといひて物事に飽き人柄のやうにきかし前句の先達ても忘れ此度も又忘れしといふ意に通はしたるなるべしかゝる人柄の船の者杯に有るべし

むく起にこして参る観音 利牛

むく起は俗言にて起たまゝ杯いふ意なれば此句のよしては俗言のよといふ意にきくべし但し此句のよしてはくわしくいへば聊こゝろよからず若寅刻起を假名にてむつ起と有りしをむく起と寫し誤りたるにはあらざるか然るときはにしてはに爲て之猶後の人の考をまつ附意は廣袖をうへにひつはりて朝まだきにもの詣するさま

燃にこする薪と尻手よさこくへて 野坡

然にこするのさはきの誤にて燃にこするにはあらざるか尻手は後手ならん附意はむく起に物詣する人よりさきに起きたる人有りて曲突杯焚き捨てたるを出がけにさしくふるさまならん尻手といふにてかくきこゆる

十四五兩のふりまはこする 孤屋

ふりまはしといふ詞は活く詞なれども此句の如くするといふ天爾波にてうくる時は名詞の如くなる之花見する月見するの如し猶わか身上にふるなかもせしまに此歌のながめもせしといふ天爾波にてうけたる故名詞の如くなりたる之此詞につきてせしとましのわかれをしるべし附意前句の薪さしくべ杯するを帶杯と見立て十四五兩は營業の資本金杯あらんか  
月花にあきあけ城の跡をぬき 利牛  
あきあけ城一書に堡壁と見ゆ小城之月花こゝは二の巻の十三句目にて花の座あるに月此處まで出でざる故月花となしたるなれど此句につきては月にも花にも淋しき小城跡と解すべき之附意と十四五兩のふりまこしするを旅商人杯と見立てたるなるべし

弦打風海雲とる桶 孤屋

弦打は讃州網の浦の弦打山之海雲と海蘊水雲杯とも書くもどくとよむべし海苔の類之弦打原にどに文字を添へてさくべし附意の前句の小城跡を磯邊となしたる之一書に紀州の加田とさくてもよかるべし

れど定むるは狭し

三才 機嫌よく蠶は庭におきぬ、  
野 坡

一書に蠶は三眠三起廿七日にして老す三眠と庭休竹休舟休之といふ又一書に四度の休有り終を庭休といふとも見ゆ附意は海雲とりて稼くも有り蠶かひて稼くも有る此あたりの賤がさまなるべし

小晝の頃の空静なり  
利 牛

小晝は未だ午時に至らざる頃此なまは塵なり之附意は小晝頃の長閑なるに蠶の起きかゝりたるなればしさいなし

椽端に腫れたる足然投げ出して  
弘 屋

足煩ふ人の小晝の空の長閑ければ椽端に出たるさまあればしさいなし但し打越の庭は蠶の庭休の起きかゝりときくべし家の庭となす時は此句の椽端わるし

鍋の鑄おけ板念いれて見る  
野 坡

句意解に及ばず附意椽端に足投げ出して鍋の鑄かけ見るさまなれど念入れて見るといひて足煩ふ人の徒然なるやうにきかしたるなるべし又前句の出してのて文字にうち合ひたり

麥畑の替地に渡る傍示杭  
利 牛

此麥畑は夏ときくべし此句の附意は聊遠きやうに覺ゆれど前句の鑄かけ見るを迂遠の人と見立て替地に双方立會杯して事多き時もいさゝの事よも念入れ過ぎて埒あかずもどかしきさま杯にや

賣人もしらす頼政の筆  
弘 屋

賣人もは何も何ものもなる故買人もときあゆる之頼政は人のしる處されば注せず附意は替地を舊家の没落となしたるなれど賣人も買人もしらする在所のさまきこゆるこ

物ごとく子もちたなまはた、くさよ  
野 坡

物事も斯の如くつらひたるもは余意なし此もはくわしくいへばのなるべしおればは已然段の詞をばにてうけたる故已よなりたればといふ意だ



くさは俗言麗容の意之だ、くさにはつかひ捨てたるになる故前後の句に  
うちあひたり附意はだ、くさある故頼政の筆をもしらす賣りたるさまな  
るべけれとこゝに紙屑杯にまじりたるやうにきこゆる之

又御局の古着いた、く 利牛

又といへばいつぞやもいた、きたるあるべし附意は宮仕へ杯なし居たる  
人の今は人の妻にありて子もまうけたれどしあはせあしくて貧しく暮ら  
すさまなるべし

岐王寺のうへよ上れを二尊院 孤屋

岐王寺は嵯峨に有り二尊の釋迦彌陀之此句の如き一筋に狭く解く時は御  
局に古着いた、きてかへる道ともすべけれと御局に岐王寺となしたる二  
句の間ににはひあれば廣くきく時はいるやうにもさかるべし都て附意は  
斯の如き處まゝ有れども解譯は一途になしたれば凡例にもいひし通り畢  
竟といづれの句にも有れ注解を捨て、廣くきくべし

けふもけんぬく寂しぬまけま 野坡

けんかくは懸隔にて天地雲泥寒暑懸隔杯いふが如しかりけりはく有りけ  
りの約り昨日は岐王寺に法會杯有りて賑としかりけり今日は懸隔寂しか  
りけりとさくべし

薄雪のとまろく初手杖降り出し 利牛

初手そのを重きをおれども俗言あてがたし猶追々降るやうに見ゆるとい  
ふやうの意を此をにもたしたる之此を眼をとちて心にて見るべし猶天附  
波には斯の如き意をふくみたるものまゝ有り附意は此雪のふり出しを寂  
しき意に通としたるなればくたくしく解くべからず

一つくありに鱈の雲 鴈屋

一つくなりひひとつに塊りたる之雲鴈の鴈の鴈之雲鴈菊鴈杯と書く煮て  
食すべし耐に浸して食するも亦佳之と三才圖繪に見ゆ附意は薄雪の降り  
出し雲鴈を食するさまならんか亦雪に雲ともなしたるなるべし

錢さしに菰ひきちきる朝の月 野坡

句意はさこねたる通り之附意は雲鴈を商ひ物となし朝の月にて朝市とき

うしたるなるべし

あめす、きとる裏の塀あまひ 利牛

あめす、きは滑煤莖榎樹より生すす、は煤色きは莖の上界之といふ榎莖  
榎根上より叢生す微香有りて美味之といふ滑煤莖榎樹種類なるべし塀あ  
まひの塀間之附意ハ又此莖を賣買なすさまならんか

め城縫ひて無理も鳴あする鴉の聲 孤屋

鴉の眼を縫ひて鳴かしめ鴉をとる園之鳴かするは命の字の意之附意は榎  
木のあたりに鴉とるさまなるべし

又たのみして美濃たよりきく 野坡

又頼は直接に便なす事能とざる理由有りて間接に便を頼むなれど此詞又  
たのみしてとあす時と又たのみは名詞の如くなりてしてと天附波之前に  
ひきたるながめせしまにといふ詞の如し附意は憚る事有りてしのび居る  
間の業に鳥とり杯するさまならん

あ、あすに中の己の日扱まつるあり 利牛

中の己の日といかある神を祭るかいかなる佛を祭るかしらされど此日を  
殊も大切に於て祭る意を以て前句の又頼してまで美濃の便をきくと美濃  
の事を殊に大切に於する意も通ひしたるえまつるありは未なりよてはいと  
いふ意に

入来る人よ味噌豆と出ま 孤屋

一書に己の日に味噌をたぐをよしとぞといふいかいにや入来る人の此家  
にかいさすに中の己の日を祭るありといふ意にきくべし

まぢあひる本綿裕の龍田川 野坡

すぢあひと斜にて龍田川は染模様なるべけれと裁と龍とをいひかけたる  
なるべし附意と前句を田舎の家と見立て娘の衣杯裁さまならんか

お茶屋の見ゆる宿のとりつき 利牛

茶店の見ゆる宿の入口なれば前句を田舎娘の旅姿とあしたるなるべしお  
茶屋といふ詞にて娘杯のやうにきこゆる之かの字御の字杯故なくしてつ  
かふべからずこと此文字に限るに非ず都ての詞要なき處につらひたるは

ほやくとんとほころす雲ちぎれ 孤屋

ほやくとは準ふるといふは爆竹左義長はこらすは燃やす正月の詞に燃やす焼く杯いふをいみてはこらすはこらす杯いふの雲ちぎれは雲の散りきれて晴る空の附意はとんとほころす延年講の夜の明けはなれ宿の入口杯も見わわたるさまなるべし

水菜よ鯨まこしる総汁 野坡

水菜にて鯨をも春季になしたるなり附意ととんとほころす若き者杯の惣汁なるべし

花のうちひき越して居る榎原 利牛

花のうちひき越して居る榎原にひき越し居るさまにて此句の附意は前句を裏になしてさくべし又前句を現在になす時は此句は裏なるべし則前句の惣汁を大勢の家内と見立て其さわがしきをいひて榎原より引越し居るさまなるを花のうちといひてさわがしき意をさかえたる之山

家集に開ならんと思ひける頃花見に人々のまうてさければ花見にとひれつゝ人のくるのみそあたらさくらの科よはありける花もちり人もこさらんをりは又山のかひにてのどかなるべし但し此處の三の裏の九句目なれども前に春季出てたる故花をくりあげたるなり

尻軽よする返事きよく 孤屋

句意は解に及ばず附意は花のうち榎原に引越し居るは故有りてしのひ居る人杯と見立其侍史杯のかゝるをりにもまめくしく仕ふるさまならんか但し此附意はかく解かされはさゝがたけれを強て解きたるものゆゑ注解になつむべからず

おちぬるうそく時の雨の音 野坡

おちぬるは雨の落ちかゝるかうそく時は一書に薄暮といふ里言ならんう附意と雨用意杯するさまにて前句を丁稚杯と見立てたるならん

入船つゝく月の六月 利牛

入船つゝくは淡あるべし月の六月の六月のうちの月夜の頃をかくいひた

るあらん附意は前句を夕立と見立て六月となしたるか前句雨なれば六月の月とはなしがたければ月の六月となしたるならん

拭きたる、お上の敷居ひぬらする 孤屋

お上は床の上之俗言を其まゝつかひたる之但お茶屋に六句去之御傘にはどとどおと七句去となすひからそるは令の字の意之附意は船宿杯となしたるこ

あほいひつものる詞ぬらぬひ 野坡

からのひは争ひいさかひ杯の里言之附意は拭掃除杯する下部等なるべし

大水のあげくに畑の砂のけて 利牛

大水は洪水之あげくは俗言擧句の果杯いふを斯くつかふやうにありたる詞と思へる附意は出水の跡の砂のけ杯する百姓等の詞のらかひなすさまなるべし

何年菩提しれぬ朽の木 孤屋

何年菩提と幾年も經し事をいふ俗言之幾年經しもしれぬ朽の木とさく

べま此句の如きくわしくいふ時はいさゝか詞といひがたし矢ひたる朽の木何年菩提しれぬといふやうにもさこゆる之此集は俗言をとりてつかひたる事最も多し俳諧に俗言をつかふはしさいなしと雖も余り興に乗して俗言をつかふ時は調はざる詞の出来れば今の俳諧に用心すべき之附意は洪水に流れ來たる朽の木なるべし

敷金に弓同心のあととと繼ぎ 野坡

敷金に弓同心の跡を譲りうけたるなるべし幕府の頃足輕杯に株ととさへひそくに賣買なしたる事有ればそれらの類ひならんをされを附意の此同心の屋敷に何年菩提もしれざる古き朽の木有るさまなるべし

まる九十日濕とまつらふ 利牛

まる九十日は俗言九十日の間之濕の微毒之附意と前代の同心の久しく濕を煩ひ其費用の爲に敷金に跡を譲りたるなるべし

投打も服立つまゝ、よめつた也 孤屋

まゝは隨の字の意にて正しきつかひさまめつたはめつたやたら杯いふ